

粵語・桂南平話の共通祖語の声母¹

濱田武志

キーワード： 粵語 桂南平話 系統関係 再建 声母

要旨

粵語と桂南平話の共通祖語である粵祖語には、①二系列(歯茎音・反り舌音)の舌頂(coronal)破擦音・摩擦音を有する、②微母には軽唇音化を経た形である* η -が再建される、③止攝開口三等の精組・莊組にはそれぞれ* η 及び* η が再建される、という改新的特徴が見られる。その一方で粵祖語は、①全濁声母を有声音として保存する、②匣母は開口合口ともに* η -を保存する、等の保守的の特徴を有している。

拙論(2013a)に続き、本稿は粵語・桂南平話の共通祖語である粵祖語の声母の再建初案を提示する。なお本稿では各方言の声調について、陰平、陽平、陰上、陽上、陰去、陽去、陰入、陽入は、それぞれ1、2、3、4、5、6、7、8を音節末に附してこれを表記する。陰入及び陽入に分裂が見られる場合は、中古音の深・臻・曾・通の各攝(羅常培 1933 の述べる内転)に主に分布するもの、及び、中古音の次濁声母に由来する声母を取る音節に主に分布するものを上陰入・上陽入と見做して71・81と表記し、咸・山・宕・江・梗の各攝(羅常培 1933 の述べる外転)に主に分布するもの、及び、中古音の全濁声母に由来する声母を取る音節に主に分布するものを下陰入・下陽入と見做し、72・82と表記する。

1. 喉音

喉音はその調音上の性質から介音要素との関係が強いため、議論の便宜上、開口韻と合口韻に分けて再建形を示す。

1. 1. 影母、以母・雲母(開口)

珠江デルタの方言で、[ŋ]と[ʔ](音韻的にはゼロ声母)が混用される現象がChao (1947: 19-21)や袁家驊(1960: 183)で言及されているが(例えば、「愛」 $\eta i 5$ 、「安」 $\eta \alpha n 1$)、これは20世紀中に発生した比較的新しい言語変化であるとされる(張洪年 2002)。中古音の影母の推定音価も* η -である事も踏まえて考えるに(平山 1967a: 145-146)、影母に敢えて* η -を再建する十分な根拠は見当たらない。

¹ 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金 248065 「梧州話系言語及びその周辺言語の通時的研究」の助成を受けたものである。

以母や雲母は多くの方言で j-或いは介音-i-の形で報告されているが、少なからぬ地点で h-で実現している。以母や雲母の実現形 h-は古形の残存ではなく、雲母が以母と合流した後に *kj->h-となった、という通時的変化については、覃远雄(2005)が既に論じている。以母も雲母も、粵祖語の段階で既に合流していたと考えるのが妥当である。

中古音との対応上、影母は陰調、以・雲母は陽調を声調に持つため、影母と以・雲母とは厳密な意味に於いてミニマルペアを成す訳ではない。また、広州方言では影母も以・雲母も音節頭に半母音要素 j を伴っており、共時的には声母 /j/ を取っていると考える事が出来る。しかし、以下の表に見るように、南寧方言等で影母がゼロ声母で実現する事や、以・雲母が摩擦音化を起こしている事を踏まえるに、影母と以・雲母にはそれぞれ互いに異なる再建形を与えるのが妥当であろう。影母には *ʔ- を、以・雲母には *kj- を、それぞれ再建できる。

表 1. 粵語・桂南平話各地点の影・以・雲母の実現形(開口)

	爺	意	移	已	腰	搖	憂	油
中古音	假開三 平麻以	止開三 去志影	止開三 平支以	止開三 上止以	效開三 平宵影	效開三 平宵以	流開三 平尤影	流開三 平尤以
玉林 ²	je1/je2	ji5	ji2	ji4	jiu1	jiu2	jau1	jau2
靈山橫州 ³	je2	ei5	hi2	hi4	iu1	hiu2	jeu1	jeu2
橫県 ⁴	i1 / je1	ei5	hi2	hi4	iu1	hiu2	jeu1	jeu2
南寧石埠 ⁵	je2	oi5	hoi2	hi4	iu1	hiu2	jeu1	jeu2
賓陽復興 ⁶	ji1	ei5	həi2	həi4	jiu1	jiu2	jəu1	jəu2
広州 ⁷	je2	ji5	ji2	ji4	jiu1	jiu2	jeu1	jeu2

	有	闌	炎	鹽	音	淫	焉	延
中古音	流開三 上有雲	咸開三 平鹽影	咸開三 平鹽雲	咸開三 平鹽以	深開三 平侵影	深開三 平侵以	山開三 平仙影	山開三 平仙以
玉林	jau4	jim1	jim2	jim2	jam1	jam2	jin1	jin4
靈山橫州	jeu4	im1	him2	him2	jəm1	jəm2	hin1	hin2
橫県	jau4 / jeu4	im1	him6	him2	jəm1	jəm2	—	hin4
南寧石埠	jeu4	im1	him2	him2	jəm1	jəm2	in1	hin2

² 以下、表に於いて「玉林」は广西壮族自治区地方志编纂委员会(1998)に報告される玉林方言を指す。

³ 以下、表に於いて「靈山橫州」は黄昭艳(2006)に報告される靈山県豊塘鎮の橫州話を指す。

⁴ 以下、表に於いて「橫県」は黄海瑶(2008)に報告される橫県百合鎮方言を指す。

⁵ 以下、表に於いて「南寧石埠」は林亦(2009)に報告される南寧市石埠鎮方言を指す。

⁶ 以下、表に於いて「賓陽復興」は陈海伦 et al.(2009)に報告される賓陽県復興鎮方言を指す。

⁷ 以下、表に於いて「広州」は詹伯慧(1987)に報告される広州方言を指す(但し表記の一部を改める)。

賓陽復興	jəu4	jim1	jim2	jim2	jəm1	jəm2	jin1	jin2
広州	jəu4	jim1	jim2	jim2	jəm1	jəm2	jin1	jin2

	因	引	秧	陽	應-當	蠅	嬰	羸
中古音	臻開三 平眞影	臻開三 上軫以	宕開三 平陽影	宕開三 平陽以	曾開三 平蒸影	曾開三 平蒸以	梗開三 平清影	梗開三 平清以
玉林	an1	jan4	ja1	ja2	ɛŋ1/ɛŋ5	ɛŋ1	ɛŋ1	ɛŋ2
靈山橫州	ɛn1	jɛn4	ɛŋ1	hɛŋ2	ɛŋ1	jɛŋ2	ŋɛŋ1	jɛŋ2
橫県	ɛn1	jɛn4	iaŋ1	hiaŋ2	ɛŋ1	seŋ2	ɛŋ1	heŋ2
南寧石埠	ɛn1	jɛn4	jɛŋ1	jɛŋ2	un1	un1	un1	hun2
賓陽復興	jən1	jən4	jɛŋ1	jɛŋ2	əŋ1	əŋ1	əŋ1	həŋ2
広州	jən1	jən4	jœŋ1	jœŋ2	jɯŋ1	jɯŋ2	jɯŋ1	jɯŋ2/jɛŋ2

地点毎に以・雲母のh-化の起こる字が必ずしも一致しておらず、例えば宕攝は以母が靈山県横州話でh-、南寧市石埠鎮の方言(以下、石埠方言)及び賓陽県復興鎮の方言(以下、賓陽方言)でj-で実現しているが、梗攝は以母が靈山県横州話でj-、石埠方言及び賓陽方言でh-で実現している。また、效・咸・山攝は賓陽方言でj-、靈山県横州話及び石埠方言でh-で実現している。

このような各地で以・雲母のh-化の条件が様でない状況を踏まえるに、以・雲母のh-化という現象は各地で非一的に起こったものと見做すのが妥当であり、また、止・效・咸・山・梗攝で以・雲母のh-化が見られる事から、*j->h-という音変化は、長介音韻母i:-の直音化と関連した現象と考えられる(拙論2013b)。

1. 2. 影母、以母・雲母(合口)

開口の場合と同様、合口に於いても以母と雲母は合流している。以・雲母は、粵祖語で前舌的母音要素が韻母に再建されている遇攝(*y)、山攝(*ɣ:ən/t)、通攝(*yŋ/k)の各合口三等には*j-が、粵祖語で後舌的母音要素が再建されている韻、即ち蟹攝(*(u)ei)、止攝(*ui)、臻攝(*un/t)、宕攝(*ɔ:əŋ/k)、曾攝(*(u)ip/c)、梗攝(*(u)ip/c)の各合口三等には*w-が、それぞれ再建される。それに対して影母は、何れの攝にも*ʔ-が再建される。*j-が止・效・咸・山・梗攝でh-化したのと同様に、*w-もまた宕攝でh-音化が発生しており、*w-と*j-という二つの接近音は音変化の軌を一にしている。

表2. 粵語・桂南平話の影・以・雲母の実現形(合口)

	餘	雨	芋	衛	銳	威	唯	圍
中古音	遇合三 平魚以	遇合三 上麌雲	遇合三 去遇雲	蟹合三 去祭雲	蟹合三 去祭以	止合三 平微影	止合三 平脂以	止合三 平微雲

玉林	ɟy2	ɟy4	wu6	wai6	ɟui6	wai1	wai2	wai2
靈山橫州	hy2	hui4	——	wɛi6	ɟui6	wɛi1	wɛi2	wɛi2
橫県	hy2	hy4	hou6	wɛi6	ɟui6	——	wɛi2	wɛi2
南寧石埠	hi2	hoi4	hoi6	wui6	ɲui5	wui1	wui2	wui2
賓陽復興	hui2	hui4	hui6	wɛi6	ɟui6	wɛi1	wɛi2	wɛi2
広州	ɟy2	ɟy4	wu6	wɛi6	ɟøɥ6	wɛi1	wɛi2	wɛi2

	冤	緣	遠	勻	雲	枉	往	域
中古音	山合三 平元影	山合三 平仙以	山合三 上阮雲	臻合三 平諄以	臻合三 平文雲	宕合三 上養影	宕合三 上養雲	曾合三 入職雲
玉林	ɟyn1	ɟyn2	ɟyn4	wan2	wan2	wuɔŋ3	wuɔŋ4	wuek81
靈山橫州	in1	hin2	hin4	ɟən2	wən2	wɔŋ3	wɔŋ4	wik81
橫県	yn1	hyn2	hyn4	ɟən2	wən2	wɔŋ3	wɔŋ4	wik81
南寧石埠	win1	win2	win4	wun2	wun2	ɲuŋ3	huŋ4	wuut81
賓陽復興	jun1	jun2	jun4	ɟən2	wən2	wuŋ3	huŋ4	wək8
広州	ɟyn1	ɟyn2	ɟyn4	wən2	wən2	wɔŋ3	wɔŋ4	wik8

	榮	營	雄	熊	融	擁	勇
中古音	梗合三 平庚雲	梗合三 平清以	通合三 平東雲	通合三 平東雲	通合三 平東以	通合三 上腫影	通合三 上腫以
玉林	wɛŋ2	wɛŋ2	oŋ2	joŋ2	joŋ2	joŋ3	joŋ4
靈山橫州	wɛŋ2	jeŋ1	huŋ2	juŋ2	juŋ2	juŋ3	juŋ4
橫県	wɛŋ2	jeŋ1	huŋ2	huŋ2	juŋ2	juŋ3 / uŋ3	juŋ4
南寧石埠	joŋ2	wun2	hoŋ2	joŋ2	joŋ2	oŋ3	joŋ4
賓陽復興	wəŋ2	wəŋ2	joŋ2	joŋ2	joŋ2	oŋ3	joŋ4
広州	wɪŋ2	ɟɪŋ2	huŋ2	hoŋ2	joŋ2	joŋ3	joŋ4

1. 3. 曉母(開口)

曉母(開口)は通方言的に基本的に h- で実現しており、曉母(開口)には *h- が再建される。

三四等に注目すると、玉林方言は効・咸・山・宕攝で、声母の非摩擦音化が起こっている(「囂」は例外)。これは即ち、以・雲母(開口)が摩擦音化を起こさない環境と一致しており、曉母が以・雲母の音変化と好対照をなしている事が分かる。

表 3. 粵語・桂南平話の曉母の実現形(開口)

	海	希	喜	好-壞	孝	囂	曉	休
中古音	蟹開一 上海曉	止開三 平微曉	止開三 上止曉	效開一 上皓曉	效開二 去效曉	效開三 平宵曉	效開四 上篠曉	流開三 平尤曉
玉林	hoi3	hi1	hi3	hɣu3	hou5	hiu1	ɲiu3	jau1
靈山橫州	hoi3	hi1	hi3	hou3	hau5	hiu1	hiu4	jɐu1
橫県	hoi3	hi1	hi3	hɔu3	hau5	hiu1	hiu3	jɐu1
南寧石埠	hai3	hɔi1	hɔi3	hau3	hau5	hiu1	hiu3	jɐu1
賓陽復興	hø3	hɛi1	hɛi3	høu3	hau5	jiu1	jiu3	jəu1
広州	hoi3	hei1	hei3	hou3	hau5	hiu1	hiu3	jɐu1

	喊	險	吸	漢	瞎	顯	欣	鄉
中古音	咸開一 上敢曉	咸開三 上琰曉	深開三 入緝曉	山開一 去翰曉	山開二 入轄曉	山開四 上銑曉	臻開三 平殷曉	宕開三 平陽曉
玉林	hɔm5	jim3	teap71	hɔn5	ɔt72	jin3	jan1	ja1
靈山橫州	ham5	him4	kʰɛp71	hɔn5	het82	hin3	hem1	heŋ1
橫県	ham5	him3	kʰɛp71	hɔn5	ɔt72	hin3	hem1	hiaŋ1
南寧石埠	hem5	him3	kʰɛp7	han5	jat7	hin3	hɛn1	jɛŋ1
賓陽復興	ham5	jim3	ɣʰɛp71	hɔn5	jat72	jin3	jɔn1	jɛŋ1
広州	ham5	him3	kʰɛp71	hɔn5	het8	hin3	jɛn1	hœŋ1

	黑	興-起	嚇
中古音	曾開一 入德曉	曾開三 平蒸曉	梗開二 入陌曉
玉林	hak71	heŋ1	ha3
靈山橫州	hek71	heŋ1	hak72
橫県	hek71	heŋ1	hak72
南寧石埠	hek7	hum1	hɛk7
賓陽復興	hek71	hœŋ1	hak72
広州	hek71 / hak71	hiŋ1	hak72

1. 4. 曉母(合口)

曉母(合口)は広州方言などの方言でfで実現するが、多くの方言に見られる「分」と「婚」などの対立は、両者の声母の再建形を違える事によって初めて説明可能となる。曉母(合口)に唇齒音を再建する事は出来ず、代わりに*h-を再建するのが妥当と考えられる。

表4. 粵語・桂南平話の曉母の実現形(合口)(参照: 影母・非母)

	火	窩	花	蛙	虎	夫妻	烏	灰
中古音	果合一 上果曉	果合一 平戈影	假合二 平麻曉	假合二 平麻影	遇合一 上姥曉	遇合三 平虞非	遇合一 平模影	蟹合一 平灰曉
玉林	wɿ3	wɿ1	wɔ1	wɔ1	wu3	fu1	wu1	wui1
靈山橫州	hu3	u1	wal	wal	hu3	fu1	u1	hui1
橫県	hu3	u1 / wɔ1	wal	wal	hu3	fu1	u1	hui1
南寧石埠	hu3	u1	wal	wal	hɔ3	fɛu1	ɔ1	hɔi1
賓陽復興	hou3	ou1	wal	wal	hou3	fou1	ou1	hui1
広州	fɔ3	wɔ1	fa1	wal	fu3	fu5	wu1	fui1

	煨	揮	威	歡	血	婚	分	葦
中古音	蟹合一 平灰影	止合三 平微曉	止合三 平微影	山合一 平桓曉	山合四 入屑曉	臻合一 平魂曉	臻合三 平文非	臻合三 平文曉
玉林	wui1	k ^{hw} ai1	wai1	wun1	jyt71	wan1	fan1	wan1
靈山橫州	ui1	wɛi1	wɛi1	hun1	hit81	wɛn1	fɛn1	wɛn1
橫県	ui1	wɛi1	—	hun1	hyt71	wɛn1	fɛn1	wɛn1
南寧石埠	ɔi1	k ^h ui1	wui1	hun1	wit7	wun1	fɛn1	wun1
賓陽復興	ui1	wɛi1	wɛi1	hun1	jut72	wɛn1	fan1	wɛn1
広州	wui1	fɛi1	wɛi1	fun1	hyt72	fɛn1	fɛn1	fɛn1

	荒	汪	方	轟	兄	烘	胸
中古音	宕合一 平唐曉	宕合一 平唐影	宕合三 平陽非	梗合二 平耕曉	梗合三 平庚曉	通合一 平東曉	通合三 平鍾曉
玉林	wuɔŋ1	wuɔŋ1	fuɔŋ1	hoŋ1	wɛŋ1	hoŋ5	hoŋ1
靈山橫州	wɔŋ1	wɔŋ1	fɔŋ1	k ^{hw} ɛŋ1	heŋ1	huŋ1	huŋ1
橫県	wɔŋ1	wɔŋ1	fɔŋ1	k ^{hw} ɛŋ1	wɛŋ1	huŋ6	huŋ1
南寧石埠	huŋ1	wɔŋ1	fuŋ1	k ^{hw} ɛŋ1	wun1	hoŋ1	hoŋ1
賓陽復興	huŋ1	wuŋ1	fuŋ1	huŋ1	wɛŋ1	hoŋ1	hoŋ1
広州	fɔŋ1	wɔŋ1	fɔŋ1	k ^w ɛŋ1	hŋ1	huŋ5	huŋ1

1. 5. 匣母(開口)

一二等の匣母(開口)は多くの方言に於いて h- で実現しているが、一部の方言では h- ではなく

ゼロ声母で実現する現象がみられる(广西壮族自治区地方志编纂委员会 1998、陈小燕 2009 等)。そこで、匣母(開口)一二等には曉母(開口)と異なる再建形*fi-を立てて、玉林方言や梧州話型粵語方言などで*fi > ɸ、その他の方言で*fi > h という変化が発生した、という音変化を想定する事が出来る。

表 5. 玉林方言の匣母(一二等)の実現形(開口)

	何	霞	害	號碼	含	汗	痕	杭	行-爲
中古音	果開一 平歌匣	假開二 平麻匣	蟹開一 去泰匣	效開一 去號匣	咸開一 平覃匣	山開一 去翰匣	臻開一 平痕匣	宕開一 平唐匣	梗開二 平庚匣
玉林	ɣ2	ɸ2	ɸi6	ɣu6	ɸm2	ɸn6	an2	uɔŋ2	a2
広州	hɔ2	ha2	hai6 ⁸	hou6	hɛm2	hɔn6	hɛn2	hɔŋ2	hɛŋ2

四等の場合、広州方言のように、蟹攝を除いて以・雲母との間に区別が無い方言もある。しかし、廉州方言(广西壮族自治区地方志编纂委员会 1998)や珠海方言(詹伯慧 et al. 1987)のような、以・雲母の h-化が起こらない方言で匣母が h-で実現している。匣母(開口)には一等から四等まで*fi-を再建出来る。赵彤(2007)は《分韻撮要》の声母について、匣母と以・雲母とが合流していると述べるが、《分韻撮要》の反映する音韻体系では匣母四等に於いて既に*fi->j-が発生しているものと考えられる。

表 6. 粵語・桂南平話各地点の匣母(四等)の実現形(開口)

	系	嫌	協	弦	賢	刑	形	型
中古音	蟹開四 去霽匣	咸開四 平添匣	咸開四 入帖匣	山開四 平先匣	山開四 平先匣	梗開四 平青匣	梗開四 平青匣	梗開四 平青匣
廉州 ⁹	hai5/hei5	him2	hip8	hin2	hin2	jen2	jen2	jen2
珠海 ¹⁰	hei5	him2	hip8	in2	hin2	heŋ2	heŋ2	heŋ2
靈山横州	hei6	him2	hip72	hin2	hin2	heŋ2	heŋ2	heŋ2
玉林	hai6	jim1	jip71	jin2	jin2	eŋ2	eŋ2	eŋ2
広州	hei6	jim2	hip72	jin2	jin2	juŋ2	juŋ2	juŋ2

1. 6. 匣母(合口)

広州方言など多くの方言で、匣母(合口)は通攝を除き接近音で実現するが、一部方言では摩擦音 h-または f-の形で実現しており、粵祖語の段階では*fi-であったと考えられる。石埠方言の

⁸ 香港方言(詹伯慧 1987)は hoi6。

⁹ 以下、表に於いて「廉州」は广西壮族自治区地方志编纂委员会(1998)に報告される廉州方言を指す。

¹⁰ 以下、表に於いて「珠海」は詹伯慧 et al.(1987)に報告される珠海市香洲区前山镇方言を指す。

方言(陈海伦 et al.2009、林亦 2009)は入声分裂現象が匣母(合口)の摩擦音であった頃の段階を反映しており(覃远雄 2005)、匣母(合口)が接近音 w- (但し南寧市亭子鎮の方言(陈海伦 et al. 2009 等。以下、亭子方言)等では β-) で実現するものの、入声が全濁(阻害音)と同様に下陽入で実現している。合口二等に於いては、通方言的に w- で実現しており、南寧諸方言に見られる入声分裂現象の存在だけが、合口二等に *f- を祖形として選択する妥当性を保証する根拠となっている。しかし、*f- が入声韻にのみ立ち舒声韻に立たないというのは、音韻体系としての自然さを認め難い。そこで本稿では、粵祖語に於いて *(y)a- は *f- とのみ共起し、*w- と共起する事はなかったと考え、通方言的に接近音 w- で実現する「華」等の匣母合口舒声韻にも、*f- を再建する。

表7. 粵語・桂南平話各地点の匣母の実現形(合口)

	和平	華	狐	回來	懷	惠	換	活
中古音	果合一 平戈匣	假合二 平麻匣	遇合一 平模匣	蟹合一 平灰匣	蟹合二 平皆匣	蟹合四 去霽匣	山合一 去換匣	山合一 入末匣
廉州	vo2	vo2	fu2	fui2	vai2	fui5	vun5	fut8
珠海	wɔ2	wa2	fu2	ui2	wai2	wei5	un5	ut5
順德 ¹¹	uo2	ua2	fu2	fui2	uai2	uei6	fun6	fut8
順德 (Ball) ¹²	fo	—— (話 wá)	——	——	wái	——	—— (垣 fún)	füt
南寧石埠	hu2	wa2	ho2	hoi2	wai2	wui6	wen6	wet82
靈山橫州	hu2	wa2	hu2	hui2	wai2	wei6	hun6	hut82
橫県	hu2	wa2	hu2	hui2	wai2	wei5	hun6	hut82
玉林	wɔ2	vo2	wu2	wui2	wɔi2	jui6	wun6	wuɔt82
台山	v ^h ɔ2	va2	vu2	v ^h ɔi2	vai2	fi5	v ^h ɔn5	v ^h ɔt8
広州	wɔ2	wa2	wu2	wui2	wai2	wei6	wun6	wut8

	還-原	滑	縣	穴	魂	核-棗-	黃	鑊
中古音	山合二 平刪匣	山合二 入點匣	山合四 去霰匣	山合四 入屑匣	臻合一 平魂匣	臻合一 入沒匣	宕合一 平唐匣	宕合一 入鐸匣
廉州	van2	vat8	jun5	jut71	fun2	vet8	voŋ2	vok8
珠海	wan2	——	yn5	yt8	wen2	het8	wɔŋ2	wɔk8
順德	uan2	uat8	hyn6	hyt8	uen2	het8/ uet8	uɔŋ2	uɔk8
順德 (Ball)	wén	wét	——	hüt /	——	——	foŋ2	fok

¹¹ 以下、表に於いて「順德」は詹伯慧 et al.(1987)に報告される仏山市順德区大良鎮方言を指す。

¹² 以下、表に於いて「順德 (Ball)」は Ball (1900-1901)に報告される順德方言を指し、表記は同論文に準ずる。

				höt				
南寧石埠	wan2	wat82	win6	hit81	wun2	wət82	huŋ2	wuk82
靈山橫州	wan2	wat82	hin6	hit81	wən2	wət82	wɔŋ2	wək81
橫県	wan2	wat82	hyn6	hyt82	wən2	wət81	wɔŋ2	wək82
玉林	wɔn2	wət82	jyn6	jyət82	wan2	wat81	wuɔŋ2	wuək82
台山	van2	vat8	z ^u ɔn8	z ^u t8	vun2	hat8 vut8	vɔŋ2	vək11 ¹³
広州	wan2	wat8	jyn6	jyt8	wən2	wət8	wɔŋ2	wək8

	弘	或	横縱	劃	螢	紅
中古音	曾合一 平登匣	曾合一 入德匣	梗合二 平庚匣	梗合二 入麥匣	梗合四 平青匣	通合一 平東匣
廉州	hoŋ2	vək8	veŋ2	vek8	jen2	hoŋ2
珠海	wɛŋ2	wak8	waŋ2	wək8	ɛŋ2	hoŋ2
順徳	ueŋ2	uak8	uaŋ2	uək8	ien2	hoŋ2
順徳 (Ball)	—	wák	wáng	—	—	hung
南寧石埠	hoŋ2	huk82	wɛŋ2	wək82	wun2	hoŋ2
靈山橫州	huŋ2	wək81	waŋ2	—	jeŋ2	huŋ2
橫県	—	wək82	waŋ2	wak82	jeŋ2	huŋ2
玉林	oŋ2	wuək82	wa2	wa6	wɛŋ2	oŋ2
台山	faŋ2	vak8	vaŋ2	vak8	zen2	høŋ2
広州	wɛŋ2	wak8	waŋ2	wak8	juŋ2	hoŋ2

2. 牙音

2. 1. 見母、群母

見母は多くの方言で k-で実現する。覃远雄(2006)の述べるように、多くの方言に於いて韻母の影響を受ける形で口蓋化(破擦音化)が発生しているが、見母に*k-を再建する事に特に問題はなかろう。

群母もまた見母と同様に口蓋化(破擦音化)の現象が見られる。Tsuji(1980)や拙論(2012)で指摘されるように、breathy voice の形で全濁声母が有声性を持つ方言も存在する。本来、全清である見母と全濁である群母との間には声調の類の相違が存在しており、見母と群母は厳密な意味でのミニマルペアをなさないが、群母(開口)には、見母に無い有声性を認めて*g-を再建するのが妥当であると考えられる。この*g-の音声実現は、有声性を保存する現代方言の実現形と類似した[k^h]に近い音で発音されていたと推定される。広東の諸方言を中心に、声調の別に従って無気

¹³ 調値は誤記。陽入(21)の誤りか。

音と有気音に分裂する現象がみられるが、これは牙音以外の有声破裂音・破擦音に共通して見られる音変化である。また、広西の東南部には、謝建猷(2007)に報告される靈山県の方言等、有声破裂音・破擦音が一律で無声有気音で実現する方言も存在している。

表8. 地点間に見られる見・群母の口蓋化現象の異同

	家	交	九	求	舊	減	今	金
中古音	假開二 平麻見	效開二 平肴見	流開三 上有見	流開三 平尤群	流開三 去宥群	咸開二 上臻見	深開三 平侵見	深開三 平侵見
玉林	kɔ1	kɔu1	teau3	teau2	teau6	kɔm3	team1	team1
賀州八步 ¹⁴	ka1	kau1	ʃou3	ʃou2	ʃou6	kam3	ʃom1	ʃom1
靈山橫州	ka1	kau1	tsɛu3	ts ^h ɛu2	tsɛu6	kam4	kɛm1	kɛm1
橫県	ka1	kau1	tsɛu3	tsɛu2	tsɛu6	kam3	kɛm1	tsɛm1 / kɛm1
南寧石埠	ka1	kau1	kɛu3	kɛu2	kɛu6	kam3	kɛm1	kɛm1
賓陽復興	ʃa1	ʃau1	ʃəu3	ʃəu2	ʃəu6	ʃam3	ʃəm1	ʃəm1
靈山 ¹⁵	ka1	kau1	ʃɛu3	ʃ ^h ɛu2	ʃ ^h ɛu6	kam3	kɛm1	kɛm1
広州	ka1	kau1	kɛu3	k ^h ɛu2	kɛu6	kam3	kɛm1	kɛm1

	琴	斤	芹	江	宮	窮	共
中古音	深開三 平侵群	臻開三 平殷見	臻開三 平殷群	江開二 平江見	通合三 平東見	通合三 平東群	通合三 去用群
玉林	ɛam2	kan1	kan2	kaŋ1	koŋ1	koŋ2	koŋ6
賀州八步	ʃom2	ʃuon1	——	koŋ1	kuŋ1	ʃuŋ2	kuŋ6
靈山橫州	k ^h ɛm2	kɛn1	k ^h ɛn2	kaŋ1	kuŋ1	k ^h uŋ2	kuŋ6
橫県	kɛm2	kɛn1	kɛn2	kaŋ1	kuŋ1	kuŋ2	kuŋ6
南寧石埠	kɛm2	kɛn1	kɛn2	kaŋ1	koŋ1	koŋ2	koŋ6
賓陽復興	ʃəm2	kən1	kən2	ʃaŋ1	koŋ1	koŋ2	koŋ6
靈山	k ^h ɛm2	kɛn1	k ^h ɛt2 ¹⁶	kaŋ1	kuŋ1	k ^h uŋ2	k ^h uŋ6
広州	k ^h ɛm2	kɛn1	k ^h ɛn2	koŋ1	koŋ1	k ^h oŋ2	koŋ6

2. 2. 溪母

溪母は、通方的に k^h-で実現する傾向にある字も、曉母と同一形式で実現する傾向にある字

¹⁴ 以下、表に於いて「賀州」は陳小燕(2009)に報告される賀州市八歩区桂嶺鎮方言を指す。

¹⁵ 以下、表に於いて「靈山」は謝建猷(2007)に報告される靈山県県城方言を指す。

¹⁶ 韻尾は-n の誤記か。

も、共に存在する。前者の例としては「溪」「靠」「敲」「搗」「困(-難)」「卻」「確」等が、後者の例としては「起」「去」「口」「欠」「牽」「寬」「糠」「殼」「客」「輕」「慶」「空」等が挙げられる。また、溪母の実現形式には地域的偏りも見受けられ、例えば「考」「欽」「謙」「康」「坑」「恐」等は南寧以西の諸方言で k^h -で出る傾向があり、方言間で実現形式が揺れる現象が認められる。これが、祖語の段階に於いて $*k^h$ -と $*h$ -という二つの実現形式が存在していた事を示すのか、それとも、粵祖語以降のある段階に於いて $*k^h$ -の摩擦音化が各地で並行的に複数回発生した事を示すのかについては、結論を保留したい。本稿では、粵祖語に音素として $*k^h$ -が存在する事、中古音の溪母に粵祖語の $*k^h$ -が対応する事、溪母の一部については祖語の段階で既に $*h$ -だったものが存在する可能性がある事を述べるにとどめて、具体的な字(形態素)の再建形については、各方言間の系統関係をより詳細に解明した上で、稿を改めて議論を深化させる事とする。

2. 3. 疑母

疑母は一二等に於いて一般に η -で実現している。一二等の合口は多くの方が円唇性を喪失しているが、賓陽県の各方言が ηu -の形で実現する(陈海伦 et al. 2009)。賓陽県の各方言が古形を保存している希少な方言であると見做す事に特段大きな問題は生じない。疑母(一二等)には $*\eta$ -を再建する事が出来る。 η -とゼロ声母との混淆現象が新しい時代の音変化である事は先述の通りである。

但し、「外」(蟹合一去泰疑)は複数の地点で声母が m -で実現している(覃远雄 2006)。これは、声母が介音の唇音成分の影響を受けて m -へと変化したものである可能性があり、疑母が m -に変化する例としては、「頑」(山合二平山疑)が複数の地点で $man2$ に類する形で実現する事が他に知られる(陈 et al. 2009: 237。但し、同書が述べるように、この字音が「蛮」の訓読である可能性もある)。このような疑母 m -は例外的音変化の結果と見做せる可能性がある。

なお、疑母にも見・群母に見られるような口蓋化現象が存在するが、表 8 及び表 9 に示すように、各方言に於いて口蓋化の条件は見・群母と疑母とで必ずしも同一でない。

表 9. 地点間に見られる疑母の口蓋化現象の異同(一二等)

	牙	咬	牛	巖	吟	眼	銀
中古音	假開二 平麻疑	效開二 上巧疑	流開三 平尤疑	咸開二 平衡疑	深開三 平侵疑	山開二 上産疑	臻開三 平眞疑
玉林	$\eta p2$	$\eta pu4$	$\eta au2$	$\eta pm2$	$\eta am2$	$\eta on4$	$\eta an2$
賀州八步	$\eta a2$	$\eta au4$	$\eta ou2$	$\eta am2$	$\eta om2$	$\eta an4$	$\eta on2$
靈山橫州	$\eta a2$	$\eta au4$	$\eta eu2$	$\eta am2$	$\eta em2$ / $jem2$	$\eta an4$	$\eta en2$
橫県	$\eta a2$	$\eta au4$	$\eta eu2$	— (岩 $\eta am2$)	$\eta em2$	$\eta an4$	$\eta en2$

南寧石埠	ŋa2	ŋau4	ŋeu2	—— (宕 ŋam2)	jəm2	ŋan4 / ŋan4	ŋen2
賓陽復興	ŋa2	ŋau4	ŋəu2	——	ŋəm2	ŋan4	ŋən2
台山 ¹⁷	ʔga2	ʔgau3	ʔgeu2	ʔgam2	ʔgim2	ʔgan3	ʔgan2
広州	ŋa2	ŋau4	ŋeu2	ŋam2	jəm2	ŋan4	ŋen2

	樂音-	硬	額	玉
中古音	江開二 入覺疑	梗開二 去映疑	梗開二 入陌疑	通合三 入燭疑
玉林	ja6	ŋa6	ŋa6	ŋok81
賀州八步	——	ŋaŋ6	ŋak8	ŋiuk8
靈山橫州	ŋak82	ŋaŋ6	ŋak82	ŋuk81
橫県	——	ŋaŋ6	ŋak82	ŋuk81
南寧石埠	lak81 -(快)樂	ŋeŋ6	ŋek81	ŋok81 / ŋoi6
賓陽復興	ŋak8	ŋaŋ6	ŋak8	ŋok8/ ŋui6
台山	ʔgok8	ʔgaŋ5	ʔgak8	ʔgok8
広州	ŋok8	ŋaŋ6	ŋak8	jok8

詹伯慧 et al. (1994)の報告する広東省連州市(旧連県)の方言では、宕攝開口三等を除いて疑母が安定して日母と対立している(ibid. 53-54.)。しかし現段階では、広東省北部の諸方言について、所謂粵北土話との系統関係が未だ明らかではないため、本稿では同地の言語資料を再建に用いる事を保留したい。

目下、止攝開口に於いて、疑母と日母との対立を証明する情報を提供する方言は確認されず、《分韻撮要》からも両者の対立の根拠が見出されない(赵彤 2007)。但し、「蟻」や「毅」といった、多くの方言で韻母が i で出ない字については、粵祖語の段階で既に *i 以外の実現形を有していた可能性と、疑母と日母の対立を反映している可能性の二つを考慮する必要がある。

また、咸・山攝にも粵祖語の段階に於ける *ŋ- と *ŋ̥- の対立が存在していた証拠を、先述の連州方言以外に見出す事が出来ないが、しかし宕攝では、廉州白話(广西壮族自治区地方志编纂委员会 1998)など、*ŋ- と *ŋ̥- の対立を保存する方言が幾つか存在する。梗攝の場合、日母字が得られないため *ŋ- と *ŋ̥- の対立の有無を梗攝開口三四等について論ずる事は難しいが、複数の方言で *ŋ- で実現している事を踏まえ、*ŋ- を再建しておく。その他の攝も、疑母字の絶対数こそ少ないが、*ŋ- を再建するのが妥当であろう。

¹⁷ 以下、表に於いて「台山」は詹伯慧 et al.(1987)に報告される台山市台城镇方言を指す。

表 10. 粵語・桂南平話各地点の疑・日母実現形の対照

	魚	如	藝	蟻	義	毅	兒	二
中古音	遇合三 平魚疑	遇合三 平魚日	蟹開三 去祭疑	止開三 上紙疑	止開三 去真疑	止開三 去未疑	止開三 平支日	止開三 去至日
賓陽復興	ɲui2	ʃui2	ɲi5	ɲi4 / ɲet8	ɲi6	ɲi6	ɲi2	ɲi6
南寧亭子 ¹⁸	ɲy2	y2	ɲi6	ɲi4	ɲi6	ɲei6	ɲi2	ɲi6
廉州	ɲu2	ju2	ɲei5	ɲi3	ɲi5	ɲei5	ɲi5	ɲi5
台山	ʔgui2	ʔgui2	ʔgai5	ʔgei3	ʔgei5	ʔgai5	ʔgei2	ʔgei5
広州	jy2	jy2	ɲei6	ɲei4	ji6	ɲei6	ji2	ji6

	危	牛	柔	嚴	染	吟	任責-	言
中古音	止合三 平支疑	流開三 平尤疑	流開三 平尤日	咸開三 平嚴疑	咸開三 上琰日	深開三 平侵疑	深開三 去沁日	山開三 平元疑
賓陽復興	ɲuɔi2	ɲəu2	ɲəu2	ɲim2	ɲim4	ɲəm2	ɲəm6	ɲin2
南寧亭子	βəi2	ɲieu2	iəu2	im2	im4	ɲəm2	ɲəm6	ɲin2
廉州	ɲei2	ɲəu2	jəu2	ɲim2	ɲim3	ɲəm2	ɲəm6	jin2
台山	ʔgui2	ʔgeu2	ʔgiəu2	ʔgiam2	ʔgiam5	ʔgim2	ʔgim5	ʔgun2
広州	ɲei2	ɲəu2	jəu2	jim2	jim4	jəm2	jəm6	jin2

	燃	原	軟	銀	人	仰	讓	凝
中古音	山開三 平仙日	山合三 平元疑	山合三 上獮日	臻開三 平真疑	臻開三 平真日	宕開三 上養疑	宕開三 去漾日	曾開三 平蒸疑
賓陽復興	ʃin2	ɲun2	ɲun4	ɲən2	ɲən2	ɲeɲ4	ɲeɲ6	ɲəɲ2
南寧亭子	yn2	yn2	ɲyn4	ɲən2	ɲən2	ɲieɲ4	ɲieɲ6	neɲ2
廉州	jin2	jun2	ɲun3	ɲen2	ɲen2	ɲɲ3	ɲɲ5	nen2
台山	ʔgen2	ʔgun2	ʔgun1	ʔgan2	ʔgin2	ʔgian4	ʔgian5	ʔgen2
広州	jɪn2	jyn2	jyn4	ɲen2	jən2	jæɲ4	jæɲ6	jɪɲ2

	迎	戎	絨	玉	獄	肉	辱
中古音	梗開三 平庚疑	通合三 平東日	通合三 平東日	通合三 入燭疑	通合三 入燭疑	通合三 入屋日	通合三 入燭日

¹⁸ 以下、表に於いて「南寧亭子」は陈海伦 et al.(2009)に報告される南寧市亭子鎮方言を指す。

賓陽復興	ŋəŋ2	joŋ2	ŋoŋ2	ŋok8 / ŋui6	ŋok8	ŋok8	ʃok8
南寧亭子	ŋeŋ2	—	iəŋ2	ɲək81	ɲək81	ɲək81	ɲək81
廉州	ŋeŋ2	joŋ2	joŋ2	ŋok8	ŋok8	ŋok8	ʃok8
台山	ʰgeŋ2	zəŋ2	zəŋ2	ʰgok8	ʰgok8	ʰgok8	zək71
広州	juŋ2	juŋ2	juŋ2	ʃok8	ʃok8	ʃok8	ʃok8

咸攝・山攝と宕攝・梗攝とで疑母の再建形が分裂している格好であるが、この現象は粵祖語 *r:ə- の単母音化(i 化)の問題との関連が疑われる。咸攝(*r:əm/p)・山攝(*r:ən/t)は多くの方言で単母音化を起こしているが、それに対して宕攝(r:əŋ/k)は多くの方言で二重母音の段階を留め、梗攝(*r:əŋ/c)は長介音*r:を早い段階で多くの方言が喪失していると考えられる(拙論 2013a)。表 10 のデータを忠実に解釈するならば、咸攝・山攝には*ŋ₂、宕攝・梗攝には*ŋ₁を再建するのが妥当であろうが、しかし η>ŋ/____[+high, -back, +ATR]という発生し易い音変化が粵祖語よりも新しい段階に於いて並行的に発生した可能性を否定する事が出来ない。例えば桂南平話のうち南寧以西の諸方言は、単系統群を構成している可能性があるが(拙論 2013c)、各方言に於いて「蟻」は押し並べて韻母 i で実現しており、この現象は音変化 η>ŋ/____[+high, -back, +ATR]が、粵祖語よりも新しい時代に発生した可能性を示唆するものである。

本稿では各攝の疑母(三四等)について暫定的に、遇・止・咸・山・通攝に*ŋ₂、蟹・流・深・臻・宕・曾・梗攝に*ŋ₁をそれぞれ再建するが、粵祖語と各娘方言との間の結節点たる中間段階の再建作業や、諸方言間の系統関係の解明、周辺非漢語との対照を通じて、今後再建形を改め、全ての攝に*ŋ₁を再建する事もあり得る。

3. 舌頭音

3. 1. 端母

端母は多くの方言で t で実現しているが、玉林方言(广西壮族自治区地方志编纂委员会 1998)などでは d で、賀州市八步区(陈小燕 2009)等では ɬ で実現しており、また、四邑片の台山方言(詹伯慧 et al. 1987)等ではゼロ声母で実現している。平田昌司(1983-1984)、陈忠敏(1989)等は、非漢語との一定の関連性の下で、華南各地の方言に於いて幫母や端母が入破音で実現したと述べる。しかし、非漢語からの影響で以てこれらの音変化を説明出来るとしても、例えば玉林方言では端母だけでなく精母も d で実現し、台山方言では定母も非破裂音化を起こしているといった言語事実がある以上、非漢語から各地の方言への影響は、祖語以前の段階で一時的に生じたものとするよりは、寧ろ各地点で並行的にこうした非漢語からの影響を被ったと考えた方が宜しい。端母については再建形に*t を立てるのが適当である。

定母は群母と同様に、有声性を認めて*d-(音声上は[tʰ]に近い)を再建する事が出来る。四邑片の諸方言では h-或いはゼロ声母で実現しているが、これは定母が声調に基づく無気音・有気音

への分化の後に非齒茎音化を起こした事を示唆している。

表 1 1. 粵語・桂南平話各地点の端母・定母の実現形

	多	駝	賭	度	低	提	地	島
中古音	果開一 平歌端	果開一 平歌定	遇合一 上姥端	遇合一 去暮定	蟹開四 平齊端	蟹開四 平齊定	止開三 去至定	效開一 上皓端
玉林	dx1	tx2	du3	tu6	dai1	tai2	ti6	dsu3
賀州八步	lɔ1	tɔ2	lu3	tu6	loi1	toi2	ti6	lu5
靈山	tɔ1	tʰɔ2	təu3	tʰəu6	tɛi1	tʰɛi2	tʰi6	təu3
台山	ʰɔ1	hʰɔ2	u3	u1	ai3	hai2	ei5	au3
広州	tɔ1	tʰɔ2	tou3	tou6	tɛi1	tʰɛi2	tei6	tou3

	道	膽	淡	端	團	當應	塘	定
中古音	效開一 上皓定	咸開一 上敢端	咸開一 上敢定	山合一 平桓端	山合一 平桓定	宕開一 平唐端	宕開一 平唐定	梗開四 去徑定
玉林	tru6	dɔm3	tɔm4	dyn1	tyn2	duɔŋ1	tuɔŋ2	teŋ6
賀州八步	tu6	lam3	tam4	lun1	tun2	lɔŋ1	tɔŋ2	ten6
靈山	tʰəu6	tam3	tʰam4	tun1	tʰun2	taŋ1	tʰaŋ2	tʰiŋ6
台山	au5	am3	ham2	ʰɔn1	hʰɔn2	ɔŋ1	hɔŋ2	en5
広州	tou6	tam3	tam6/ tʰam4	tyn1	tʰyn2	tɔŋ1	tʰɔŋ2	tɔŋ6

3. 2. 透母

透母は、四邑片の一部方言でh-で出るといふ、端母と並行した音変化が観察されるが、他地点では専らtʰ-で実現している。*tʰ-を再建する事に問題はない。

表 1 2. 粵語・桂南平話各地点の透母の実現形

	他	土	太	挑擔	灘	湯	聽見	通
中古音	果開一 平歌透	遇合一 上姥透	蟹開一 去泰透	效開四 平蕭透	山開一 平寒透	宕開一 平唐透	梗開四 平青透	通合一 平東透
玉林	tʰɔ1	tʰu3	tʰɔi5	tʰiu1	tʰɔn1	tʰuɔŋ1	tʰeŋ1	tʰɔŋ1
賀州八步	tʰa1	tʰu3	tʰai5	tʰiu1	tʰan1	tʰɔŋ1	tʰen5	tʰuŋ1
台山	ha1	hu2	hai1	hiau1	han1	hɔŋ1	hian1	hɔŋ1
広州	tʰa1	tʰou3	tʰai5	tʰiu1	tʰan1	tʰɔŋ1	tʰiŋ1 / tʰeŋ1	tʰɔŋ1

3. 3. 泥母・娘母

多くの漢語系言語と同様に、泥母と娘母との間に音韻的対立や音声的差異は通方言的に確認されず、一般に n-で実現する(但し、denasalization を起こした ^hd-という形で出る方言が四邑片に見られる(詹伯慧 et al. 1987))。泥母と娘母は粵祖語でも同一視して問題ないと考えられ、*n-が再建される。幾つかの方言に見られる n-と l-の混淆現象は、後世の音変化によるものと見做せよう。

4. 齒頭音

多くの方言で、精組と莊・章・知組の対立が観察される。しかしその一方で、19世紀歐文資料で精・莊組と章・知組とで止攝開口三等が z と i に書き分けられる現象が観察される(そして、高田 2000 が述べるように、この書き分けは韻書の単なる踏襲ではなく実際の言語音を反映したものであると考えられる)他、現代方言でも百色市の白話(陈海伦 et al. 2009)等で、止攝開口三等が精・莊組と章・知組とで異なる実現形を取っている。

表 1 3. 粵語・桂南平話各地点の齒頭音・正齒音・舌上音の実現形(止攝開口三等)

	紫	刺	撕	知	智	池	枝	紙
中古音	止開三 上紙精	止開三 去寘清	止開三 平支心	止開三 平支知	止開三 去寘知	止開三 平支澄	止開三 平支章	止開三 上紙章
玉林	di3	ʰi5	ʰi1	tei1	tei5	tei2	tei1	tei3
南寧石埠	ʃi3	ʃʰi5	ʰoi1	ʃi1 / ʃi5	ʃi5	ʃi2	ʃi1	ʃi3
賓陽復興	ʃʰei3	ʃʰʰei5	ʰoi1	ʃi1 / ʃi5	ʃi5	ʃi2	ʃi1	ʃi3
順德	tsy3	ʰʰi5	si1	tsi1	tsi5	ʰʰi2	tsi1	tsi3
台山	tu3	ʰʰi1	ʰu1	tsi1	tsi1	ʰʰi2	tsi1	tsi3
百色白話 ¹⁹	h̥3	h̥5	h̥1	ʰi1	ʰi5	ʰʰi2	ʰi1	ʰi3
広州	ʰi3	ʰʰi5	si1	ʃi1	ʰi5	ʰʰi2	ʰi1	ʰi3
Williams(1856)	tsz'3	ts'z'5	sz'1	chi1	chi5	ch'i2	chi1	chi3
Eitel(1877)	tsz3	ts'z5	sz1	chi1	chi5	ch'i2	chi1	chi3

	翅	匙	是	歧	姿	次	糍(糍)	自
中古音	止開三 去寘書	止開三 平支禪	止開三 上紙禪	止開三 去寘禪	止開三 平脂精	止開三 去至清	止開三 平脂從	止開三 去至從

¹⁹ 以下、表に於いて「百色白話」は陈海伦 et al.(2009)で報告される百色市の粵語方言を指す。

玉林	tʰi5	ei2	ei4	ei6	di1	tʰi5	ti2	ti6
南寧石埠	ɸi5	ɸi2	ɸi6	ɸi6	ɸi1	ɸʰi5	ɸi2	ɸi6
賓陽復興	ɸi5	ɸi2	ɸi6	ɸi6	ɸəi1	ɸʰəi5	ɸəi2	ɸəi6
順德	tʰi5	tʰi2 / si2	si6	si6	tsy1	tʰy5	tʰy2	tsy6
台山	tʰi1	si2	si6	si6	tu1	lu1	——	tu6
百色白話	ɸ5	tʰi2 / ɸ2	si6	si6	ɸ1	ɸ5	ɸ2	li6
広州	tʰi5	tʰi2 / si2	si6	si6	tsi1	tʰi5	tʰi2	tsi6
Williams(1856)	ch'i5	shi2	shi6	shi6	tsz'1	ts'z'5	ts'z2	tsz'6
Eitel(1877)	ch'i5	ch'i2 / shi2	shi6	shi6	tsz1	ts'z5	ts'z2	tsz6

	私	死	四	致 ²⁰	遲	師	脂	指
中古音	止開三 平脂心	止開三 上旨心	止開三 去至心	止開三 去至知	止開三 平脂澄	止開三 平脂生	止開三 平脂章	止開三 上旨章
玉林	li1	li3	li5	tei5	tei2	ei1	tei1	tei3
南寧石埠	loi1	loi3	—— (準 loi5)	ɸi5	ɸi2	ɸei1	ɸi1	ɸi3
賓陽復興	loi1	loi3	loi5	ɸi5	ɸi2	ɸei1	ɸi1	ɸi3
順德	sy1	sei3	sei5	tsi5	tʰi2	sy1	tsi1	tsi3
台山	lu2	lei3	lei1	tsei1	tʰi2	lu1	tsi1	tsi3
百色白話	ɸ1	li3	li5	tsi5	tʰi2	li1	tsi1	tsi3
広州	si1	sei3	sei5	tsi5	tʰi2	si1	tsi1	tsi3
Williams(1856)	sz'1	sz'3	sz'5	chi5	ch'i2	sz'1	chi1	chi3
Eitel(1877)	sz1	sz3	sz5	chi5	ch'i2	sz1	chi1	chi3

	至	示	屍	屎	視	滋	子	磁
中古音	止開三 去至章	止開三 去至船	止開三 平脂書	止開三 上旨書	止開三 去至禪	止開三 平之精	止開三 上止精	止開三 平之從
玉林	tei5	ei6	ei1	ei3	ei6	di1	di3	ti2
南寧石埠	ɸi5	ɸi6	ɸi1	ɸi3	ɸi6	ɸi1	ɸi3	ɸi2

²⁰ 中古音、止開三去至澄もあり。

賓陽復興	fɿ5	fɿ6	fɿ1	fɿ3	fɿ6	fəi1	fəi3	fəi2
順徳	tsi5	si6	si1	si3	si6	tsy1	tsy3	tsʰy2
台山	tsi1	si6	si1	si3	si6	tu1	tu3	tu2
百色白話	tsi5	si6	si1	si3	si6	ɬ1	ɬ3	ɬ2
広州	tsi5	si6	si1	si3	si6	tsi1	tsi3	tsʰi2
Williams(1856)	chi5	shi6	shi1	shi3	shi6	tsz'1	tsz'3	ts'z'2
Eitel(1877)	chi5	shi6	shi1	shi3	shi6	tsz1	tsz3	ts'z2

	字	絲	詞	似	寺	置	痴	恥
中古音	止開三 去志從	止開三 平之心	止開三 平之邪	止開三 上止邪	止開三 去志邪	止開三 去志知	止開三 平之徹	止開三 上止徹
玉林	ti6	li1	ti2	ti4	ti6	tei5	teʰi1	teʰi3
南寧石埠	fɿ6	loi1	fɿ2	fʰi5	fɿ6	fɿ5	fʰi1	fʰi3
賓陽復興	fəi6	lei1	fəi2	fəi6	fəi6	fɿ5	fɿ1	fʰi3
順徳	tsy6	sy1	tsʰy2	tsʰy4	tsy6	tsi5	tsʰi1	tsʰi4
台山	tu6	lu4	lu2	lu4	tu6	tsi1	tsʰi1	tsʰi3
百色白話	ɬ6	ɬ1	ɬ2	ɬ4	ɬ1	tsi5	tsʰi1	tsʰi3
広州	tsi6	si1	tsʰi2	tsʰi4	tsi6	tsi5	tsʰi1	tsʰi3
Williams(1856)	tsz'6	sz'1	ts'z'2	ts'z'4	tsz'6	chi5	ch'i1	ch'i3
Eitel(1877)	tsz6	sz1	ts'z2	ts'z4/ sz4	tsz6	chi5	ch'i1	ch'i3

	持	治	廁	柿	事	使	芝	止
中古音	止開三 平之澄	止開三 去志澄	止開三 去志初	止開三 上止崇	止開三 去志崇	止開三 上止生	止開三 平之章	止開三 上止章
玉林	tei2	tei6	teʰak71	ei6	ei6	ɛai3	tei1	tei3
南寧石埠	fɿ2	fɿ6	fʰek7	fɿ6	fɿ6	fɿ3	fɿ1	fɿ3
賓陽復興	fɿ2	fɿ6	fʰek71	fɿ6	fɿ6	fɿ3	fɿ1	fɿ3
順徳	tsʰi2	tsi6	tsʰy5	tsʰy25 ²¹	sy6	si3	tsi1	tsi3
台山	tsʰi2	tsi6	lu1	si4	lu6	lu3	tsi1	tsi3
百色白話	tsʰi2	tsi6	ɬ5	sɛi6	ɬ6	sɛi3	tsi1	tsi3
広州	tsʰi2	tsi6	tsʰi5	tsʰi3	si6	sɛi3/ si3	tsi1	tsi3

²¹ 調値は誤記。陰上(24)の誤りか。

Williams(1856)	ch'i2	chi6	ts'z'5	ts'z'2	sz'6	sz'3	chi1	chi3
Eitel(1877)	ch'i2	chi6	ts'z5	ts'z2	sz6	sz3	chi1	chi3

	志	齒	詩	始	試	時	市
中古音	止開三 去志章	止開三 上止昌	止開三 平之書	止開三 上止書	止開三 去志書	止開三 平之禪	止開三 上止禪
玉林	tei5	te ^h i3	ei1	ei3	ei5	ei2	ei4
南寧石埠	fi5	f ^h i3	fi1	fi4	fi5	fi2	fi4
賓陽復興	fi5	f ^h i3	fi1	ts ^h i3	si5	fi2	fi4
順德	tsi5	ts ^h i3	si1	ts ^h i3	si5	si2	si4
台山	tsi1	ts ^h i3	si1	ts ^h i3	Si1	si2	si4
百色白話	tsi5	ts ^h i3	sɿ1	fi3	fi5	si2	si4
広州	tsi5	ts ^h i3	si1	ts ^h i3	si5	si2	si4
Williams(1856)	chi5	ch'i3	shi1	ch'i3	shi5	shi2	shi4
Eitel(1877)	chi5	ch'i3	shi1	ch'i3	shi5	shi2	shi4

余藹芹(2006)は各方言で coronal の破擦音・摩擦音で主に実現する形態素について、互いに再建形を異にする三つのグループを設けた上で、第二グループ(事実上の精組)の再建形に於ける声母の調音点を歯茎とした上で(*ts-組)、第一グループ(事実上の知・章組)と第三グループ(事実上の莊組)に、歯茎より後ろの調音点を認める。

この第一グループと第三グループの再建形について、余藹芹(2006)は二つの再建案を提示する。一つは、第一グループの声母に歯茎硬口蓋音(alveolo-palatal, *tɕ-組)を、第三グループの声母に反り舌音(*ʈ-組)をそれぞれ再建し、三つのグループ全ての韻母を*i と再建するものであり、もう一つは、第一グループの声母と第三グループの声母に共に硬口蓋歯茎を再建した上で、第三グループの韻母に*q(若しくは*q²²)を再建し、第一グループと第二グループの韻母に*i を再建する、というものである。

一つ目の再建に対しては、余藹芹(2006)は「*tɕ-組>*ts-組/___ɿ」「*i>V/*ts-組___」「*i>V/*ts-組___」(V は様々な狭母音及び二重母音。各方言で実現形が異なる)という、粵祖語以降に発生した韻母の音変化を想定している。これに対して、①[+palatal]である*tɕ-組の後に*q が立つのは不自然であり、そして、②調音点の合致している*tɕ-組と*q が異化を起こして*q>i となる原因が説明できない、という問題点を指摘する。二つ目の再建に対しては、「*i>V/*ʈ-組___」「*i>V/*ts-組___」(V は様々な狭母音及び二重母音。各方言で実現形が異なる)という韻母の音変化を想定する。そして、より簡潔で自然な音変化が想定出来るとして、二つ目の再建を採用している。このような理由から、余藹芹(2006)は破擦音・摩擦音に*tɕ-, *tɕ-, *ʈ-の三

²² 余藹芹(2006)本文では[q]と書かれているが、恐らく誤植と推測される。

系列を認めている。

しかしながら、実際の娘言語に於いて破裂音・摩擦音の系列は高々二つしか存在せず、また、声母を三系列再建する動機は、止攝開口にしか存しない。遇攝や宕攝などの三等に見られる、莊組とそれ以外の声母とで韻母が分裂する現象を、第三系列目の再建の根拠とする考え方も有り得なくはないが、中古音のように粵祖語にも破擦音・摩擦音を三系列立てるには、より積極的な根拠が必要となろう²³。

余藹芹(2006)の議論にも全く疑問を差し挟む余地が無い訳ではない。一つ目の再建に対する分析についても、「**te*-組の後に**ɲ*が立つのは不自然である」という指摘それ自体は尤もであるが、しかし一方で**ɲ*>*i*/**ts*-組____という音変化が発生した蓋然性を低く見積もる事については、一考の価値がある。複数の19世紀欧文資料で韻母 *z[ɲ]* の存在が報告されながら、現代広州方言ではそれに *i* が対応しているという事実を踏まえるに、**ɲ*>*i*/**ts*-組____という音変化の可能性を否定し切るのは難しい。抑も**ɲ*という音は中古音より後の時代に官話などで生じた実現形であり、**ɲ*よりも**i*をより古い形として予見的に捉える事には、全く理由が無いとは言えない。しかし実際に、19世紀欧文資料の韻母 *z[ɲ]* が現代広州方言の *i* に対応しているのであり、

²³ 漢語系言語である以上、粵語や桂南平話が何らかの共通祖語を有する事は必然である。系統の観点から方言同士の関係を考察したり、粵語・桂南平話そのものが漢語系言語の中でどのような系統的な位置づけにあるのかを解明したりするにあたっては、祖語により古い特徴を認めようとする姿勢よりも、むしろどこまで新しい祖語が再建可能かを考える事に意義があるように思われる。

McCoy (1986)等の示す二重子音を粵祖語に認める説を採用する事を留保する理由もまた此処に存する。現代広東語に *iambic* な強勢パターンをとり前部音節が無声調的に実現する多音節語が存在するのは事実である(例: *kək72 lək71 tɯ3* 「角落頭」(隅。 *tɯ3* 「頭」は接尾辞)。自然談話中で第一音節と第二音節が縮約して *kə lək71* (*kə* は無声調)のように発音される事がある)。McCoy (1986)等は、この事実に加え、『集韻』等で「角」に虚数切が反切として与えられている事を踏まえて、粵祖語に声母**kl*が存在したと考えられる。この事実を元に粵祖語に *iambic* な強勢パターンをとる多音節語が存在したと推定する事は出来るが、しかし、粵祖語が二重子音を有していたと音韻的に認定し、かつ、現代語のこうした多音節語に於ける前部音節声母と後部音節声母が粵祖語の単一音節の二重子音声母に由来している、という仮説は、より多くの証拠が示される必要があると考えられる。「角」が古い時代の漢語に於いて何らかの側面接近音の要素を有していたとしても、それが粵祖語の段階にまで保存されていたという事が、「角落」という二音節が縮約されて発音されるという共時的現象からは証明し難い。また、仮に「角」「落」両字が同一韻母をとる事を根拠として両字の声母が同一音節中の声母**kl*に由来すると考えるのなら、貴港城関方言(陈晓锦 et al.2010)で「角」は *kək7* 「落」は *lək8* が出る等、一部方言で両字の韻母が一致しない現象が見られる事実についても整合性を求めねばならない(なお、「角」は粵祖語**kək7* が再建され、「落」は**lək8* が再建される。抑も中古音の段階で「角」は覺韻、「落」は鐸韻と、韻目を異にしている)。

Yue-Hashimoto (1972)や余藹芹(2006)は、多音節語を根拠とする二重子音再建の他、更に別の手法を以てより多くの二重子音を粵祖語に再建している。例えば「儉」(吝嗇)という形態素が香港方言等で *kim6*、台山方言で *kiem6*・*liem3* でそれぞれ実現している事を根拠として、「儉」に声母 *gl**を再建しており、「脱」(衣服をぬぐ)が多くの方で *thɯt* 及びそれに準ずる形で実現し、「ぬける」という口語的動詞は *lɯt7* 及びそれに類する形で実現している事から、「脱」に声母**thl*-を再建している。しかし、「儉」に関しては台山方言の *kiem6* と *liem3* が同源語であるという証明がなされていない。二重子音声母を再建して上古音にも類似したような祖体系を想定するよりは寧ろ、粵祖語の段階で既に *synonym* として声母**l*-のもの**k*-のものが存在していたと考えたほうが、より合理的であるように考えられる(もしくは、漢字の字形に起因する読音の類推の可能性も考え得る)。「脱」と「ぬける」に関しても同様に、両形態素を同源語と認定する証拠が未だ十分でない。余藹芹(2006)が述べるように、タイ系言語にも声母 *th*-の形態素と *l*-の形態素が見られ(例: タイ語(Thai) *ʰɔːtDL1* 「ぬぐ」(Pittayaporn 2009: 92-93 では、タイ祖語に遡らない漢語由来の語とされる)、*lutDS1* 「ぬける」)、この言語事実が側面音声母と歯茎破裂音声母との関連性を示しているとされるが、意味的な近似から両形態素を同源と見做すよりは、寧ろ前者(声母 *th*-)を漢語由来の語、後者(声母 *l*-)をタイ系言語由来の語として(即ち、非同源語として)それぞれ捉えるのが適当ではないかと考えられる。

現代方言の*i*のより古い形式として**ɨ*を想定する事は不自然とは言えない。

本稿は、余藹芹(2006)が述べる所の第二グループと第三グループの両者の韻母に**i*以外の韻母を再建する事で、粵祖語に破擦音・摩擦音を二系列立てるだけで合理的音変化を説明可能であると考える。拙論(2013a)では止攝開口三等に**i*を再建しているが、粵祖語に破擦音・摩擦音を二系列しか認めないとするならば、この再建を改めねばならない。表13に示すような精・莊組に於ける様々な実現形が生じている原因を、声母の側から説明しないと必然的に、止攝開口三等(精組及び莊組)に、**i*以外の別の再建形を立てる事になる。

表14. 粵祖語止攝開口三等の再建形の対照

中古音声母	精組	知・章組	莊組
余藹芹(2006)再建案1 声母	<i>*tɕ</i>	<i>*tʂ</i>	<i>*tʂ</i>
余藹芹(2006)再建案1 韻母	<i>*i</i>	<i>*i</i>	<i>*ɨ</i>
余藹芹(2006)再建案2 声母	<i>*tɕ</i>	<i>*tʂ</i>	<i>*tʂ</i>
余藹芹(2006)再建案2 韻母	<i>*i</i>	<i>*i</i>	<i>*i</i>
粵祖語声母 (本稿)	<i>*tɕ</i>	<i>*tʂ</i>	<i>*tʂ</i>
粵祖語韻母 (本稿)	<i>*R₁</i>	<i>*i</i>	<i>*R₂</i>

韻母**R₁*、**R₂*(*R*はrhymeの頭文字)は、**i*とも**y*とも**u*とも異なり、また、先述のような*y*や*u*、*oi*といった音に変化し得るものでなくてはならないが、ただ、音韻的には**R₁*と**R₂*は同一音素として解釈出来る可能性がある。具体的音価は、**R₁*には**ɨ*や**ɥ*、**R₂*には**ɨ*や**ɥ*が候補として考えられる。

表13に見られるように、**R₁*と**R₂*が順徳方言等に於いて合流して円唇母音で出ている事実を踏まえるに、**R₁*と**R₂*のうち一つ以上が円唇性を有すると見ると都合が宜しい。同様に、**R₁*と**R₂*が百色白話等に於いて非円唇母音で出ている事実は、**R₁*と**R₂*のうち一つ以上が非円唇母音であった事を示唆する。即ち、**R₁*と**R₂*のどちらかが円唇母音であり、どちらかが非円唇母音であった可能性が此処に考えられるのである。本稿では**R₁*に**ɨ*を、**R₂*に**ɥ*をそれぞれ再建したい。

R₂*にɥ*を再建する以上、**R₂*と共起する破裂音・摩擦音声母には、主母音と調音点の近い反り舌音を再建するのが妥当であろう。但し、知・章・莊組が後部歯茎音(postalveolar)或は歯茎硬口蓋音(alveolo-palatal)をも異音として取った可能性はあり、韻母**i*の前で**tʂ*が歯茎硬口蓋音に近い形で発音され、結果的に余藹芹(2006)の再建する音価に近い形で実現していた可能性は十分ある²⁴。

余藹芹(2006)は三グループ全ての韻母に**i*を再建する事を重視して破擦音・摩擦音を三系列

²⁴ なお、広東省連州市などの方言(詹伯慧 et al. 1994)では、反り舌破擦・摩擦音を止攝開口三等知・章・莊組の実現形に取っている。

再建したのに対して、本稿は破擦音・摩擦音を二系列のみ再建する事を重視して、*i に加えて *ɿ 及び *u を再建した格好である。

4. 1. 精母

精母は多くの方言で coronal の破擦音をとる。玉林方言(广西壮族自治区地方志编纂委员会 1998)や賀州方言(陈小燕 2009)、四邑片諸方言(詹伯慧 et al. 1987)では精母が破裂音化しているが、莊母・章母・知母では破裂音化が起こっていない。

Morrison (1828)や Bridgman (1841)、Eitel (1877)、Ball (1888)等の 19 世紀粵語資料では齒頭音及び止攝開口三等莊組は ts や s で、止攝開口三等莊組を除く正齒音・舌上音は ch や sh でそれぞれ綴られており(加えて、Eitel 1877 及び Ball 1888 では無気音と有気音の対立がアポストロフの有無で明示されている)、齒頭音と正齒音・舌上音が両者とも破擦音で実現していながら互いに対立を保存している。精母の再建形としては、*ts-が適当である。

表 15. 粵語・桂南平話各地点の精母の実現形

	左	租	醉	焦	尖	尊	雀	精
中古音	果開一 上舒精	遇合一 平模精	止合三 去至精	效開三 平宵精	咸開三 平鹽精	臻合一 平魂精	宕開三 入藥精	梗開三 平清精
玉林	ɬɿ3	du1	dui5	diu1	dim1	dyn1	da3	deŋ1
賀州八步	tə5	tu1	tui5	tiu1	tim1	tun1	tiak71	tɛn1
台山	tʰɿ3	tu1	tui1	tiau1	tiam1	tun1	tiak71	ten1
広州	tsɿ3	tsou1	tsøy5	tsiu1	tsim1	tsyn1	tsœk72	tsɿŋ1/ tsɛŋ1

4. 2. 清母

清母も精母と同様に、玉林方言などで破裂音化して tʰ- で出ている他は、coronal の無声有気破擦音で実現する。精母と並行する形で *tʰ- が再建出来よう。

表 16. 粵語・桂南平話各地点の清母の実現形

	醋	猜	草	參	村	倉	清	聰
中古音	遇合一 去暮清	蟹開一 平咍清	效開一 上皓清	咸開一 平覃清	臻合一 平魂清	宕開一 平唐清	梗開三 平清清	通合一 平東清
玉林	tʰu5	tʰɿ1	tʰu3	tʰɒm1	tʰyn1	tʰuŋ1	tʰeŋ1	tʰoŋ1
賀州八步	tʰu5	tʰai1	tʰu3	tʰam1	tʰun1	tʰøŋ1	tʰɛn1	tʰuŋ1
台山	tʰu1	tsʰai1	tʰau1	tʰam1	tʰun1	tʰoŋ1	tʰɛn1	tʰøŋ1
広州	tsʰou5	tsʰai1	tsʰou3	tsʰam1	tsʰyn1	tsʰoŋ1	tsʰeŋ1	tsʰoŋ1

4. 3. 心母

心母は一般に s-, t-, θ- で実現しており、南寧市石埠鎮の方言(陈海伦 et al. 2009、林亦 2009) など、精母や清母が知・莊・章母や徹・初・昌母と対立を喪失しているが、心母は生・書母と対立を保存している方言もある。心母には、精母*ts-や清母*tsʰ-と調音点や調音方法を同じくする*s-が再建できる。

表 17. 粵語・桂南平話各地点の心母の実現形

	鎖	西	嫂	酸	數目	燒	衫	傷
中古音	果合一 上果心	蟹開四 平齊心	效開一 上皓心	山合一 平桓心	遇合三 去遇生	效開三 平宵書	咸開二 平銜生	宕開三 平陽書
玉林	kə3	ɬai1	ɬu3	ɬyn1	eu5	ɬiu1	ɬəm1	ea1
南寧石埠	lu3	ɬei1	ɬau3	ɬun1	ʃɔ5	ʃiu1	ʃam1	ʃeŋ1
広州	so3	sei1	sou1	syn1	sou5	siu1	sam1	seŋ1

4. 4. 從母、邪母

從母は coronal の破擦音で基本的に安定して実現する。しかし邪母は、從母と異なり、破擦音で通方言的に出る字(「謝」「袖」「尋」「詳」等)や、摩擦音で通方言的に出る字(「隧」「羨」「旋(轉)」等)、方言間で破擦音と摩擦音のどちらで実現するか安定しない字(「寺」「巡」「俗」等)がある。

基本的に中古音の從母に対しては*dz-(音声としては[tsʰ-]に近い)、邪母に対しては*dz-と*z-(音声としては[sʰ-]に近い)が、粵祖語の対応する声母として再建出来ようが、しかし*z-は、粵祖語の段階で既に*dz-との混乱が始まっていた可能性があり、音韻体系の中であまり安定した音素でなかった事が伺われる。邪母については、溪母の場合と同様に、個別の字(形態素)についてその声母の祖形を確定する事は、現時点に於いて留保したい。各方言での不規則的実現形(即ち、邪母が從母の形式で実現したもの)が、祖語の段階で既に見られていたのか、それとも、後代の音変化(有声破擦音と有声摩擦音の混乱)の結果として生じたものなのか、判断し難いためである。目下、音素として粵祖語に*dz-と*z-を認めるに止め、稿を改めて再び個別の形態素について祖形を考察する事とする。

5. 正齒音・舌上音

4 節で述べたように、正齒音・舌上音、即ち知・莊・章組には、反り舌の破擦音・摩擦音が再建される。但し、覃远雄(2008)が述べるように、莊母の一部の字の声母が鼻音で実現する現象が知られている。これらの例については、本字の同定を含めた問題として、稿を改めて考察したい。

5. 1. 知母・莊母・章母

知母、莊母、章母は、通方言的に合流して coronal の無声無気破擦音の形で実現しており、前述の通り一部の方言では精母との対立を保存している。4節の冒頭に述べたように、粵祖語は反り舌の破擦音・摩擦音を有すると考えられ、再建形として* $t_{\text{ʃ}}$ -を立てられる。

5. 2. 徹母・初母・昌母

徹母、初母、昌母もまた通方言的に合流し、coronal の無声有気破擦音の形で実現しており、* $t_{\text{ʃ}}^h$ -が再建される。

5. 3. 生母・書母

生母、書母も同様に、通方言的に合流して coronal の無声破擦音の形で実現しており、* ʃ -が再建される。

5. 4. 澄母・崇母・船母、禪母

澄母が摩擦音で出る例は通方言的に少なく、基本的に安定して破擦音で実現しており、同様に、船母は通方言的に摩擦音で安定的に実現している。粵祖語の段階で、* $d_{\text{ʃ}}$ -([$t_{\text{ʃ}}^h$ -]に近い音声)と* ʃ -([$t_{\text{ʃ}}^h$ -]に近い音声)が共に安定した音素として存在していたと考えられる。

しかし崇母と禪母は、邪母と同様に、破擦音と摩擦音の何れで実現するか地点間で必ずしも一定ではなく、また、方言内部に於いても各声母が必ずしも同一の実現形式を有している訳でもない。但し、崇母は破擦音で実現し船母は摩擦音で実現する、という傾向が確認され、「鋤」「巢」「驟」「燭」(以上、崇母)「植」(以上、禪母)は破擦音で、「樹」「時」「成」「十」(以上、禪母)は摩擦音で、それぞれ通方言的に実現する傾向があるが、「柴」「愁」「牀」(以上、崇母)「垂」「仇」「常」(以上、禪母)は地点間で一定しない傾向がある。

本稿では、粵祖語の音素として* $d_{\text{ʃ}}$ -と* ʃ -の存在を認め、澄母に* $d_{\text{ʃ}}$ -を、船母に* ʃ -を、それぞれ再建し、崇母及び禪母については、両者に* $d_{\text{ʃ}}$ -と* ʃ -両方の再建形を立てる(但し崇母は* $d_{\text{ʃ}}$ -が、船母は* ʃ -が、それぞれ基本的再建形として認められる)。個別の字の再建形については稿を改めて議論を深めたい。

6. 重唇音

6. 1. 幫母、並母

幫母は基本的に通方言的に p-で実現しているが、四邑片の開平方言(詹伯慧 1987)では v-で、玉林方言(广西壮族自治区地方志编纂委员会 1998)では b-で、それぞれ実現している。歯頭音と同様の理由から各地での並行的音変化が想定され、再建形には* p -を選択する事が出来る。

並母は群母と同様、有声音の*b-を再建する事が出来る(音声的実現は[p^h]に近いと考えられる)。四邑片の開平方言(詹伯慧 1987)では v-、h-、f-で実現しているが、それに対して玉林方言(广西

壮族自治区地方志編纂委員会 1998)で竝母はp-で実現しており、幫母との対立を保存している。

表 18. 粵語・桂南平話各地点の幫母・竝母の実現形

	把握	爬	布	歩	般	盤	兵	平
中古音	假開二 上馬幫	假開二 平麻竝	遇合一 去暮幫	遇合一 去暮竝	山合一 平桓幫	山合一 平桓竝	梗開三 平庚幫	梗開三 平庚竝
開平 ²⁵	va3	ha2	vu1	vu6	vuan1	huan2	ven1	hen2
玉林	bo3	po2	bu5	pu6	bun2	pun2	beŋ1	peŋ2
靈山	pa3	p ^h a2	pəu5	p ^h əu6	pun1	p ^h un2	piŋ1	p ^h iŋ2
広州	pa3	p ^h a2	pou5	pou6	pun1	p ^h un2	piŋ1	p ^h iŋ2 / p ^h eŋ2

6. 2. 滂母

滂母は通方的に p^h-で実現しており(四邑片の方言では、表 19 に示すように幫母や竝母と同様に、両唇音からの lenition が見られる)、*p^h-が再建される。

表 19. 粵語・桂南平話各地点の滂母の実現形

	破	怕	鋪設	派	屁	泡	偏	烹
中古音	果合一 去過滂	假開二 去禡滂	遇合一 平模滂	蟹平二 去卦滂	止開三 去至滂	效開二 平肴滂	山開三 平仙滂	梗開二 平庚滂
開平	hu1	p ^h a1	hu1	p ^h ai1	hei1	hau1	p ^h in1	haŋ1
広州	p ^h o5	p ^h a5	p ^h ou1	p ^h ai5	p ^h ei5	p ^h au1	p ^h in1	p ^h aŋ1

6. 3. 明母

明母は通方的に m-で実現しており(泥母同様、denasalization を起こした形 m^b-が四邑片の方言に見られる(詹伯慧 et al.1987))、多くの方言では微母もまた同様の実現形をとる。明母には*m-が再建出来る。

7. 軽唇音

7. 1. 非母・敷母

非母と敷母は共に通方的に f-で実現しており、*f-を再建する事に特に問題はないが、個別の字音について、破裂音 p-或いは p^h-を声母に取る方言も少なくない。但し、破裂音で実現する字が方言間で必ずしも一致しているとは限らない。

軽唇音化は、介音と主母音が複雑に関連し合って発生する音変化であり(平山 1967b)、華南に

²⁵ 以下、表に於いて「開平」は詹伯慧 et al. (1987)が報告する開平市赤坎鎮方言を指す。

伝播した後で漢語が中古音とは独立に軽唇音化を起こしたと考えるのは不自然である。これらの字には、言語層の違いを認めて、再建形に唇歯音を持つ音形と両唇音を持つ音形の二つを設ける事で対応したい。

7. 2. 奉母

奉母もまた非母と敷母と同様に f で実現するものの、いくつかの字に於いて軽唇音化を経た音形と経ていない音形とが粵祖語に共存していた状況は、非母・敷母と同様と考えられる。再建形としては、非母・敷母の *f に対する有声音 *v- (音声としては [f^v] に近い) を再建するのが妥当と考えられる。

7. 3. 微母

微母は多くの方言で明母と同様に m で実現している。しかし、賓陽県各地の方言(李连进 2000、谢建猷 2007、陈海伦 2009)や南寧市内の諸方言(李连进 2000、谢建猷 2007、陈海伦 et al.2009、林亦 2009 等)、左江・右江流域の諸方言(李连进 2000、覃世贞 2007、梁伟华 2007、梁伟华 et al.2009、李连进 et al.2009、谢建猷 2007 等)といった桂南平話や、浦北県(谢建猷 2007)、博白県 (ibid.)等の粵語では、一部の微母字が f で実現する現象が見受けられる。この現象を受けて拙論 (2013c) は、粵語・桂南平話全体の共通祖語の段階に於いて、微母が *m₁ であった可能性について述べている。本稿ではより深く、微母の問題について議論を行いたい。

粵語に於いて微母が両唇音 m で実現する事は古くから注目されており、王力(1957-1958)は、粵語の微母は軽唇音化が発生する以前の音形を保存していると述べている。龍異騰(1998)もまた、唐代の史書に現れる反切に於いて明・微両母の混用が幫・非、滂・敷、竝・奉の組よりも高頻度に起こっている事を示した上で、明・微両母の分化が比較的遅いものであったと述べる。

微母が f で実現するという言語事実は、粵語の微母の一般的実現形 m を保守的特徴と見做す従来の定説に反するよう見える。しかし、高本漢(1940: 430-436)は、南方の漢語系言語や日本漢字音、朝鮮漢字音に於いて微母が両唇音で実現する事実に触れながらも、広州方言については明母と微母が分化した後に再び微母が明母に合流した(*m₁ > m という音変化が発生した)可能性を指摘しており、広州方言の微母 m の来源について判断を保留している。Pulleyblank (1986) もまた、①微母字に口語層と文語層の区別が見られない事²⁶、②越南漢字音で微母字が v- で実現している事²⁷、③微母字と微母字以外の非組字との間で、韻母が同一の音変化を経ている事の三つを根拠として、粵語の微母 m が軽唇音化の後に再び両唇音へ変化したものとする仮説を提唱している。

微母が f で実現する字を持つ方言の音韻体系を報告した先行研究としては、南寧市の平話を報告する张均如(1987)が比較的時代が早い。同論文は、微母について「m-または f-で発音する」

²⁶ 通方言的に w- で実現する、通常の方言調査で音が得られる字は、「挽」がほぼ唯一の字例と考えられる。

²⁷ Pulleyblank (1986) は南方後期中古音に越南漢字音が基づいている可能性を述べた上で、南方後期中古音は粵祖語(proto-Cantonese)と関連があるとしている。

という言語事実を述べているが、その原因については言及していない。また、鄭作広(1994)は百色市の蔗園話について報告し、「微母の一部が唇齒音 f に変化しており、これはほかの方言と比較しても特殊な現象である」と説明している。その後も各地の桂南平話の音韻体系について報告が今日に至るまで続いているが、微母が f に出る現象が観察されても、その事実について特に詳細な分析を行う先行研究は出てきていない。

7. 3. 1. 各方言の実現形式

7. 3. 1. 1. 南寧平話

微母が f で実現する現象は、賓陽県、南寧市及び南寧市以西の方言などで主に観察される。李榮(1997)《南寧平話詞典》で報告される南寧市亭子鎮の平話の語彙全体に含まれる微母字は全部で 27 字に上るが、そのうち、18 個は m- で、6 個は f- で、そして 3 個はそれ以外の声母で(「忘」/hoŋ2/; 「挽」/βan4/; 「問」/βan6/)、それぞれ実現している。「忘」の声母 h- は一見不可解な実現形式に見えるが、この字音は「王」「旺」と声母及び韻母が同一である。「忘」の h- は、「王」等と同様に、*w->h/____[+high, +back, -ATR] という規則的音変化を経た結果と考えられ、即ち、「忘」/hoŋ2/ は微母の w- 化を経た北方の漢語系言語に由来する音形と考えるのが妥当であり、「忘」を「挽」「問」と共に β- の欄に排した次第である。

表 20. 《南寧平話詞典》の微母字の出現数

実現形式	数(異なり数)	字 ²⁸
m-	18	誣鵠霧務薇尾未味晚萬禮文紋蚊聞勿網望
f-	6	無武舞文紋物
β-・h-	3	忘挽問

南寧平話は遇攝と臻攝に微母 f が観察される方言である。微母が f に出る字は m- に出る字に対して、数も少なく、当該字が用いられる語彙も字そのものも日常性・常用性が比較的低いようにも見受けられる。これは、微母が f で実現する現象が、借用に由来するものである事を支持する根拠の一つとも見做し得ない事もないが、しかし以下に示す声調の分裂現象の存在は、微母 f を単なる借用の産物と考える事を躊躇わせる。

表 21. 《南寧平話詞典》に見られる入声分裂現象

字	中古音	実現形式
佛	臻合三入物奉	fət82
物	臻合三入物微	fət81
密	臻開三入質明	mat81

²⁸ 本字の同定は李榮(1997)を踏襲している。

南寧方言では、次濁と全濁とで陽入が分裂する。微母字である「物」は声母に摩擦音 f を持ちながら上陽入で実現しているが、この事実は、①「物」の声母 f が何らかの共鳴音に遡る事、そして、②陽入の分裂が「物」の声母が f へと変化する前に発生した事を意味している。もしも微母 f が借用によりもたらされたものであるとするならば、その借用元の漢語に於いて、「物」は①声母に m-以外の子音を有し、②陽入分裂以前の段階に南寧方言に借用されたと考えざるを得ない。

なお、同様の現象は《南寧平話詞典》だけでなく、陈海伦 et al. (2009)の報告する亭子方言にも観察されるが、しかし、南寧石埠方言(ibid.; 林亦 2009)で、「物」「勿」は下陽入で実現している事を附言しておく。

表 2 2. 南寧市各地の微母字の入声分裂状況

字	中古音	李荣(1997)	南寧亭子	南寧石埠
物	臻合三入物微	fət81	fət81	fət82
勿	臻合三入物微	——	fət81	fət82
襪	山合三入月微	mat81	mat81	mat81
佛	臻合三入物奉	fət82	fət82	fət82
罰	山合三入月奉	fat82	fat82	fat82

7. 3. 1. 2. 賓陽平話

賓陽平話では、遇・臻攝に加えて止攝でも微母が f で実現する現象がみられる。賓陽平話の主母音-ə-と-e-は、他の諸方言で-e-に合流しており、この点で賓陽方言は保守の特徴を有しているといえる(表 2 3 の蘆墟を除く)。ところが、臻攝合口三等字は一般に-ə-を主母音にとるが、非組を声母に取る字は、主母音-ə-ではなく-e-で実現している。

表 2 3. 賓陽県内各地点に於ける賓陽平話の微母の実現形

字	中古音	復興 (陳)	王靈 (陳)	新橋 (陳)	新橋 (謝)	黎塘 (陳)	蘆墟 (李)
墳	臻合三平文奉	fən2	fən2	fən2	fən2	fən2	fən2
文	臻合三平文微	fən2	fən2	fən2	fən2	fən2	fən2
問	臻合三去問微	mən6	mən6	mən6	mən6	mən6	mən6
民	臻合三平眞明	mən2	mən2	mən2	mən2 !	mən2	mən2

(陳：陈海伦 et al.(2009) 李：李连进(2000) 謝：谢建猷(2007) !: 例外的実現形式の韻母)

注目すべきは、賓陽平話で m-で実現している字に於いても、微母字が-ə-ではなく-e-を主母音に持っている事実である。これは、f が出る字も m-で出る字も、その声母が唇齒音に起源を持

つ事を示唆している。

7. 3. 1. 3. まとめ

南寧平話の声調分裂現象は、微母の実現形式の一つである f が、何らかの共鳴音に遡る可能性を示唆している。そして、賓陽平話の主母音の実現形式からは、m-で実現する微母であっても、それが唇歯音に遡る可能性が伺われる。この両者を総合するに、微母は南寧平話や賓陽平話の古い段階に於いて、共鳴音であり且つ唇歯音である *mj- で実現していた、という仮説が立てられる。

7. 3. 2. 西南官話起源説の検証

微母が f で実現する現象に対する説明として先ず考えられるのは、これらの「例外的」な一部の微母字を、他の漢語系言語からの借用によって華南にもたらされたものと見做す仮説である。例えば「而」は南寧市石埠方言(陈海伦 et al. 2009、林亦 2009)に於いて lu2 で出る等、官話に由来するとしか考えられない字音が桂南平話に見られるのは事実である。微母 f の「西南官話起源説」は或る意味に於いて常識的な仮説であり、強い説得力と妥当性を兼ね備えたように見える。しかし、以下に示すように、f で出る微母字が官話に由来すると考えるには、幾つかの問題が存在する。

西南官話は広西壮族自治区北部から湖南省南部・西部を含んだ中国大陸の南西部に広く分布している(中国社会科学院语言研究所 2012)。現代の西南官話(そして、多くの官話諸方言)は微母が以・雲母(合口)と合流しているが(钱曾怡 2010 等)、しかし、この言語事実からは「西南官話が広西進入時に於いて既に微母と雲以母(合口)との合流を起こしていた」事を保証する訳ではない。西南官話の微母が広西に進入した後に初めて雲以母(合口)と合流したという可能性も、十分考慮する必要がある。もしも西南官話が広西到達した当時に、微母が v- を保存していたとするならば、その v- が南寧平話や賓陽平話に借用された後に無声化し、微母の実現形 f を発生させたと考える事が出来る。事実、粵語・桂南平話以外の漢語に目を転じて漢語系言語全体を見渡せば、例えば湖南省の所謂新湘語は、微母と奉母が合流した上で無声化し f で実現する現象が観察される。

7. 3. 2. 1. 欧文資料の検討——微母の w- への合流について

官話の音韻体系を反映する欧文資料としては、Matteo Ricci の《西字奇蹟》(1605)、Nicolas Trigault の《西儒耳目資》(1626)、Francisco Varo の *Arte de la Lengua Mandarina* (1703) 及び *Vocabulario de la Lengua Mandarina* (17 世紀後半)²⁹、Joseph Henri Marie de Prémare の *Notitia Linguae Sinicae* (1720) 等がある。これらの明清朝の官話資料に於いては、微母字の声母が独立した声母

²⁹ ベルリン州立図書館本の年代は、Coblin et al. (2000: lii) では 1692 年と記されるが、Coblin (2006: 13) では原本に年表記無しとされる。また、大英図書館本は、1695 年とされる(Coblin 2006: 13)。

v-として基本的に記録されているが、微母字が u-等の他の声母で表記されたり、非微母字が v-で表記されたりする現象が存在する事もまた知られている(Coblin 1997 等)。

《西字奇蹟》³⁰に於いて、本文中で漢字とローマ字が併記された箇所(以下)に微母字は「望」(1回)「無」(12回)「問」(2回)「勿」(2回)「萬」(7回中3回が u-(何れも年号「萬曆」の「萬」)、4回が v-)「文」(11回)「物」(2回)「汶」(1回)「聞」(5回)「未」(2回)が出現しており、微母は概ね安定して v-で表記されている。また、微母字以外の字が v-で表記されている例として、「往」(2回)「往」(1回)「外」(2回)が出現している。《西字奇蹟》の反映する官話音では、微母は概ね v-で実現し音韻的独立性を保持しているが、非微母字が u-ではなく v-で実現する例も若干みられると言えよう。

《西儒耳目資》³¹では、「物」という字父(=字母)が立てられており、ローマ字 v がこれに対応している。物父を声母に取る字として、音節表(音韻経緯總局)中には「襪 vǎ」「微 vī」「尾 vī」「未 vī」「勿 vǒ」「無 vù」「武 vù」「務 vù」「外 vai」「汪 vām」「忘 vām」「罔 vām」「妄 vām」「晚 vàn」「萬 ván」「文 vên」「吻 vèn」「問 vén」「物 voè」の19字が挙げられ³²、このうち「外」「汪」の2字が微母と対応しない他は、17字全てが微母字である。

同音字表にあたる箇所(列音韻譜)を見ると、vaiに「外」「贖^①」(「外」「贖^①」は uaiにも所属)が、vīに「維」「惟唯」「濼維」「帷」(「維」「惟唯」「濼維」「帷」は goèi・uèi も示される)が、vìに「陞」(「陞」は uiにも所属)が、vām に「汪^②」「冠^③」「冠^③」「冠^③」(「汪^②」「冠^③」「冠^③」は uām にも所属)が、vâm に「王」(「王」は uâm・uám・vám にも所属。但し vâm・uâm にのみ異体字「^④」³⁶が付されている)が、vám に「王」「旺^④」「迂」「皇」「煌」「熿」「熿」「晃」「晃」(「旺^④」「迂」「皇」「煌」「熿」「熿」「晃」「晃」は uám にも所属。更に「熿」「熿」「晃」「晃」は hoám にも、「皇」「煌」は hoâm・hoám にも、それぞれ所属している。なお、「煌」は hoâm に於いてのみ異体字として「熿」をとっている)が、非微母字でありながら字父「物」所属字として記されている。このように、一部の中古音以・雲・匣母合口字が声母 v-を取ったり「ゼロ声母+介音-u-」を取ったりする現象が《西儒耳目資》に観察される。

一方、「物」以外の字父を声母に持つ発音も示されている微母字として、uí で出る「微」「微微」「微」「微」、uì で出る「尾」「壘^⑤」「壘^⑤」、uí で出る「未」「味」、uǎ で出る「鞞^⑥」が挙げられる³⁷。

³⁰ テキストは利瑪竇(1957)による。

³¹ テキストは金尼閣(1957)による。

³² 韻母の上に附せられる補助記号は声調を表しており、ˊは清平、ˊは濁平、ˊは上声、ˊは去声、ˊは入声をそれぞれ示す。また、韻尾-m は/-ŋ/を表している(羅常培 1930 等)。

³³ 「①」は、「劇」の下に「耳」。下付き字は、本文中でも小さく刷られている字であり、異体字を示す。

³⁴ 「②」は、さんずいに「山冠+王」。

³⁵ 「③」は、人偏に「匡」。

³⁶ 「④」は、「王」の最下画の左右に縦画を加えた字。

³⁷ 微母字に於いて声母に v-・u-をとるに種類の音価が示される現象について、藤堂(1952)は、微母が母音化した当世の正則官話と、微母の未だ母音化しない晉陝方言の二つの音韻体系を反映したためと述べる。郭書林(2003: 44)は、微母 v-を文読、u-を白読とそれぞれ見做している。

列音韻譜に於いて「微」「尾」「未」が韻母 *ui* を表す反切下字として用いられている、という事実は注目に値する。例えば濁平を例にとるならば、「微」が *vi* の他に *ui* の音を与えられているのは前述の通りであるが、*ui* は午移切と表されており、反切下字に「移」という唇音性を全く含まない字が用いられている(なお、「午」は *ù* と *gù* の二つの発音が示されている)。そして、‘*çui* (「摧」等)が測微切と表わされる等、非ゼロ声母を声母に取る音節の反切下字としては「微」が用いられているのである。ところが音韻経緯總局に於いては、*vi* には「未」が対応させられているのに対して、*vui* には「物尾」という反切が対応させられている。こうした事実からは、互いに異なる音を意図的に書き表そうとして *vi* と *ui* という二つの表記が存在しているのであり、*vi* と *ui* を単純な表記の揺れとして扱えないという事が理解される。羅常培(1930)が指摘するように、《西儒耳目資》の「列音韻譜問答」に於いて微母が二種類の音を有している事が言明されており³⁸、この事実も踏まえるに、《西儒耳目資》が参照した音韻体系(単一か複数かはさておき)に於いては、微母字が実際に [*v-*] と [*w-*] という音価を有していた事は確かと考えられる。

以上を総合するに、《西儒耳目資》に於いては、非微母字が *v-* で実現する例が見受けられ、一部の微母字が声母 *v-* 以外の声母(恐らく *w-*) を取る発音を有している等、微母の独立性が喪失していく兆しが伺われるものの、微母それ自体は比較的安定して *v-* で実現していると言える。

*Arte de la Lengua Mandarina*³⁹ は、後述の *Vocabulario de la Lengua Mandarina* に比して得られる字音数は多いとは言えないが、微母がある程度安定して *v-* で実現している事が見受けられる。同書には全 16 の微母字が見受けられるが、一部の字は *v-* と *u-* で実現形が揺れており、「微」(*v-* は 9 例中 4 例)。以下、括弧内に字音の *v* の出現回数と *v-* の出現数を示す)「尾」(3 例中 1 例)「未」(15 例中 6 例)「物」(19 例中 18 例)は必ずしも常に *v-* では実現しない。しかし、*m-* で実現する「戊」を除いた他の 11 字(「無」(12 例中 12 例)「毋」(8 例中 8 例)「侮」(3 例中 3 例)「晚」(7 例中 7 例)「萬」(22 例中 22 例)「文」(2 例中 2 例)「問」(5 例中 5 例)「勿」(1 例中 1 例)「忘」(5 例中 5 例)「妄」(6 例中 6 例)「望」(3 例中 3 例))は *v-* で一貫して実現する。

また、全 16 字の撮口呼を除いた影・以・雲・疑母(合口)字のうち、6 字については *v-* で実現する現象が見られる(「瓦」(1 例中 1 例)「外」(9 例中 9 例)「完」(5 例中 2 例)「彎」(1 例中 1 例)「王」(4 例中 4 例)「往」(2 例中 2 例))。

*Vocabulario de la Lengua Mandarina*⁴⁰ では、「蔓」「鰻」や、明母と微母の両方の反切を有する「芒」が *m-* で実現しているが(これらの字は現代の中国標準語等に於いても *m-* で実現する)、こ

³⁸ 本文(金尼閣 1957(上册): 137)に曰く、「微之一。乃同鳴之七曰物 *v*。然亦有他音。略輕之亦屬自鳴之五曰午 *u*」(三十六字母の云う微母はそれ一つが同鳴之七の物 *v* に相当するが、然し他の発音もまた存在する。それは少し軽微な発音であり、同鳴之五の午 *u* にも属している)。

³⁹ テキストは Coblin et al. (2000) に依る。本字の同定は全て同書に倣った。

⁴⁰ テキストは Coblin (2006) に依る。同様に、本字の同定は全て同書を踏襲し、同書中で本字不明とされる字音は分析の対象外とした。

の3字を除く全32字は声母がv-またはu-で実現しており、v-がu-との間で揺れている「微」(v-は26例中12例。以下、括弧内に字音のべ出現回数とv-の出現数を示す)「尾」(29例中14例)「味」(43例中41例)「未」(45例中18例)「挽」(3例中2例)「襪」(14例中3例)の6字を除いた、他の26字はv-でのみ実現している(「誣」(5例中5例)「巫」(3例中3例)「毋」(1例中1例)「無」(269例中269例)「蕪」(2例中2例)「侮」(21例中21例)「武」(18例中18例)「舞」(19例中19例)「鷓」(1例中1例)「務」(21例中21例)「霧」(10例中10例)「晩」(15例中15例)「萬」(50例中50例)「蚊」(5例中5例)「文」(119例中119例)「雯」(1例中1例)「聞」(21例中21例)「勿」(2例中2例)「勿」(1例中1例)「問」(77例中77例)「物」(87例中87例)「亡」(12例中12例)「忘」(16例中16例。「忘(王)八的」を含めるならば17例中17例)「網」(16例中16例)「望」(66例中66例)「妄」(35例中35例)。

全70字の撮口呼を除いた影・以・雲・疑母(合口)のうち、常にv-で実現する字としては「外」(80例中80例)「縮」(2例中2例)「穩」(3例中3例)「王」(17例中17例)「枉」(1例中1例)「往」(21例中21例)「旺」(1例中1例)「握」(1例中1例)「屋」(4例中4例)の9字が挙げられ、v-が一部の実現例に見られる字には「窩」(13例中1例)「渦」(3例中1例)「瓦」(35例中13例)「五」(50例中1例)「誤」(19例中3例)「歪」(8例中2例)「胃」(9例中3例)「澆」(2例中1例)「碗」(8例中5例)「彎」(23例中2例)「灣」(6例中1例)「頑」(10例中1例)「温」(19例中8例)「瘟」(6例中3例)の14字が挙げられる。

同書の示す漢語の音韻体系に於いては、v-とw-が一部の字に於いて混乱が起こっており、微母が独立性を失いつつあるものの、声母v-はある程度安定した音素として存在している事が理解される。取り分け「外」「往」「王」等は、非微母字でありながらも声母がv-に固定されているようにも見受けられる。

*Notitia Linguae Sinicae*⁴¹に示される音韻体系では、v-とw-の混乱がより進行している。本文中に出現し且つ字音が明示されている字を数えると、全23字の微母字のうち「無・无」(v-は97例中97例。以下、括弧内に字音のべ出現回数とv-の出現数を示す)「毋」(6例中6例)「舞」(5例中5例)「武」(4例中4例)「務」(1例中1例)「萬」(31例中31例)「文」(26例中26例)「聞」(8例中8例)「問」(29例中29例)「亡」(11例中11例)「忘」(4例中4例)の11字は一貫してv-で表記されているが、「勿」(3例中1例)「罔」(3例中2例)「望」(8例中6例)の3字はv-とw-(またはゼロ声母や介音-u-)とで揺れており、「霧」(1例中0例)「微」(4例中0例)「尾」(5例中0例)「味」(7例中0例)「未」(40例中0例)「挽」(1例中0例)「晩」(5例中0例)「襪」(1例中0例)「物」(21例中0例)の9字は一貫してw-(またはゼロ声母や介音-u-)で表記されている。

全44字の撮口呼を除いた影・以・雲・疑母(合口)のうち、「歪」(3例中3例)「外」(11例中11例)の2字は常にv-で実現し、「歪」(5例中4例)「温」(3例中1例)「王」(17例中15例)「往・

⁴¹ テキストは何群雄(2002)の示す影印に基づく。

往」(10例中7例)の4字はv-で実現する例が一部に見受けられる(これに加えて、「忿」がv-で1回、f-で1回、それぞれ表記される)。

以上のデータより、*Notitia Linguae Sinicae* では微母字の声母が、先行の欧文資料に比してより不安定になっていると見做す事が出来よう。

そして、*Notitia Linguae Sinicae* の英訳版である Bridgman (1847: xxxii-xxxiii) や、Morrison (1865) 等の、より新しい19世紀の資料に於いては、微母は完全にw-へと合流し音韻的独立性を喪失している⁴²。

これらの音韻資料を総合するに、欧文資料の反映する官話に於いては、①微母と他の声母との合流が完了するのは比較的遅い時期であり、微母はそれまで他の声母から一定の独立性を保ち続けていた事、そして、②v-とw-が完全に合流する前段階に於いて、微母字がw-を、微母字でない字がv-を声母にとる現象が存在した事が理解される。

しかし南寧平話や賓陽平話では、微母でない字が声母f-で出る現象は全く観察されない。従って、もしも微母の実現形f-が官話に由来すると仮定するならば、南寧平話や賓陽平話に影響を与えた西南官話は、微母がv-とw-との間で混乱を起こす以前の段階に留まっており、微母が安定してv-で実現していたと考えられる。しかし南寧平話には、「忘」「挽」「問」が、微母がw-へ変化を終えた北方系の漢語に由来すると考えられる声母を有しているという言語事実が存在する。このような矛盾は、「微母の実現形f-は官話に由来する」という仮定が誤りである事を示唆している。

7. 3. 2. 2. 粵語・桂南平話以外の現代方言

広西東北部に位置する陽朔県葡萄鎮の平声話(梁福根 2005。以下、陽朔方言)は声母にv-とw-の音韻的対立を有する桂北平話である。もし西南官話が部分的にでも微母をv-として保存していたならば、それが陽朔方言に反映される筈である。しかし陽朔方言で微母は、1字(襪)がm-、7字(蚊尾沕問網忘望)がm-⁴³、9字(無亡武舞務霧未味萬)がw-、1字(文)がɿ(音韻的にはj-と同一)で、それぞれ実現しており、v-を取る微母字は見られない(v-を取るのは専ら奉母字)。また、陽朔方言には*Notitia Linguae Sinicae* に見られるようなv-とw-の混乱も確認されない。

もしも西南官話が微母をv-として保存した状態で広西に進入したならば、微母がv-を取る例が陽朔方言に見られる筈である。また、微母がv-とw-との対立が混乱しつつある、*Notitia Linguae Sinicae* に示される音韻体系のような状態で西南官話が広西に進入したとすれば、v-とw-が混乱している状況が観察されるはずである。しかし、この二つの現象のどちらもが陽朔方言には見

⁴² 但し止攝合口三等に於いて、Bridgman (1847)では「謂」wei「未」wiのように、微母字及び「惟」「帷」「維」「唯」(wi)とそれ以外の字(wei)とが、声母ではなく韻母に於いて対立が見られる。同様にMorrison (1865)でも、微母字及び「惟」「帷」「維」「唯」(we)とそれ以外の字(wei)の間で韻母の対立が見受けられる。

⁴³ 梁福根(2005)は声母m-, n-, l-, ŋ-とは異なる「比較的重い」有声声母としてm-, n-, l-, ŋ-を立てる。

受けられない。陽朔方言が接触した西南官話に、微母が *v*-で実現する言語事実が存在した事を積極的に示す根拠は見受けられない。

7. 3. 2. 3. まとめ

過去の官話を反映した欧文資料や広西の現代方言を見てみても、西南官話が広西に進入した当時に於いて微母が *v*-で保存されていた事や、南寧方言や賓陽方言の微母 *f*-が西南官話に由来する事を支持する積極的根拠は、見出す事が出来ない。

南寧市と陽朔県の間には確かに一定の地理的距離があり、陽朔方言から得られる西南官話の情報を無条件に南寧周辺の方言に適用する事が出来る訳ではない。しかし、南寧市と陽朔県との間で、西南官話が微母に関して異なるふるまいを見せていたと考えるには、何らかの積極的根拠を必要とする。

粵語・桂南平話の微母 *f*-の起源を官話に求められないとすると、微母 *f*-の由来は粵語・桂南平話それ自身に求めざるを得ない。

7. 3. 3. 壮語の音変化からの接近

次に、先に述べた微母**mj*-の再建形の妥当性について、以下検討する。

現代の漢語系言語には、微母が *mj*-で実現する方言は管見の限りに於いて存在しない。また、例えば微母を示すパスパ文字「𑍑」(チベット文字の *ṡwa* に対応(樋口康一 2001))の音価は、Shen (2005; 2008)や Coblin (1999)は[v-]、Tumurtoogoo et al. (2010: 6-7)や Hashimoto (1978: 77-79)、Nakano (1971: 42-58)、等は[w-]と推定しており(韻尾としての音価を *w*-と推定する点は各先行研究で一致)、微母の鼻音性は目下支持されていない。

しかし、非漢語である^{チワン}壮語に見られる漢語からの借用語が、微母への**mj*-の再建を支持する重要な手掛かりを提供する。壮語北部方言には、他のタイ系言語では声母が *m*-で実現する形態素のうち、幾つかが *f*-で実現するという現象が見られ、タイ祖語(Proto-Tai)を再建する Li (1977)や Pittayaporn (2009)等の先行研究は、これらの形態素の祖形に**mw*-を与えている。この**mw*-という再建形が具体的にどのような音声実現を持つのかは定かでないが、**mw*-と**mj*-は、鼻音性や唇音性、そして、調音の起点から終点まで唇による声道の閉鎖が貫徹されていないという性質を共有していると考えられる。これを踏まえて、壮語北部方言と南寧平話や賓陽平話が同調する形で、壮語北部方言の**mw*->*f*-という音変化と並行して、微母**mj*-が *f*-へと変化した、と考えられる。

壮語は漢語から多くの借用語を受け入れている非漢語の一つであり、特に壮語の借用語と桂南平話との間の関連性については以前から指摘されている(張均如 1982 等)。しかし、壮語の借用語に於いて微母が *f*-で出る形態素(字)と、南寧平話や賓陽平話で微母が *f*-で出る形態素(字)は、必ずしも一致していない(張均如 et al. 1999: 255-256)。張均如 et al. (ibid. 438-562)の同音字表は、壮語武鳴方言に借用された微母字として、「武・舞」*fu*⁴、「戊」*fu*⁶、「万」*fa:n*⁶、「文」*man*²、「襪」*fa:t*¹⁰、「魚網」*muəŋ*⁴を提示している。このうち「万」と「襪」は、声母に *f*-をとる粵語・桂南

平話の存在は知られていない。しかし、「万」は武鳴方言の他に 21 地点(広西の大部分の地点)が(ibid. 790)、「襪」は武鳴方言の他に 4 地点(何れも南部方言)が(ibid. 666)、声母に f-を取っている⁴⁴。

もしも微母が f-で出る現象が西南官話に由来すると考えるならば、漢語の一種である桂南平話よりも非漢語である壮語の方が、より様々な音韻的環境下で微母が f-で実現しているというこの現象について、その原因を説明する何らかの根拠を積極的に示す必要がある。

なお、李心釋(2012)も桂南平話の微母 f-が壮語からの影響で生じたものと考えている。しかし同論文は壮語について *m->f-という Li (1977)や Pittayaporn (2009)等のものとも異なる音変化を想定しており、桂南平話の微母は軽唇音化を既に経ていると考える本稿とは立場を異にする。

7. 3. 4. 総括

以上の根拠より、南寧平話や賓陽平話等に見られる微母 f-は、唇齒鼻音 *mj-に遡るものであり、他方言からの借用の所産でないと考えられる。では、微母は何故 f-と m-という二種類の実現形をとるのだろうか。

漢語の側で微母が *mj->m-という、軽唇音化を逆行するかのような音変化(微母と明母の合流)を起こしているが、もとより非漢語の分布域であった華南へと進入した事が、その原因として挙げられよう。現代の華南の少数民族言語に於いても mj-を声母に取る言語は存在せず、その地域的特徴に沿う形で *mj->m-が発生したと考えられる。

微母が *mj->f-という音変化が発生した原因は、壮語北部方言で始まった *mw->f-という音変化の影響を受けたものと考えられる。微母の f-への音変化という一点について注目するならば、漢語と壮語は Sprachbund を成していると言えよう。

以上を総合するに、次のような華南の言語史を想定する事が出来る：

現代の南寧平話や賓陽平話に繋がる漢語が北方から華南へと伝播してきた当時、微母は *mj-で実現していたが、しかし周辺の非漢語の影響下、*mj は両唇音 m へと合流を起こし始めた。しかし、音変化 *mj->m-が完遂する前に壮語北部方言の分布域付近にまで到達した事で、壮語北部方言 *mw->f-と並行する形で、*mj->m-が未発生の *mj-に於いて音変化 *mj->f-が発生した。

このような言語史を描く事で、「微母が f-で出る字は日常性・常用性が比較的低い」という或る種の傾向をも説明し得る。即ち、常用性の高い語から音変化 *mj->m-が発生したために、壮語北部方言の影響を受け始める迄に *mj-を保存していた字は、必然的に常用性の低いものとなったと考えられる。

また、粵語・桂南平話では通方言的に宕攝や山攝の微母が専ら m-で実現しているが、先に述べたように、張均如 et al.(1999: 255-256)が、壮語に取り入れられた借用語「万」と「襪」が f-で実現すると報告している。こうした壮語や方塊壮字に見られる言語事実は、遇・止・臻攝以外

⁴⁴ 「万」「襪」が f-で実現するチワン語方言の中に、*mw-が f-ではなく m-に変化する方言であるチワン語南部方言も含まれるという事実は、チワン語南部方言が北部方言を通じて漢語を借用した可能性を示している。

にも*ŋ-を再建できる可能性を示している。本稿では暫定的に、遇・止・臻攝に*ŋ-を、宕・山攝に*m-を再建する。

8. 來母、日母

8. 1. 來母

來母は、東莞方言(詹伯慧 1987、陈晓锦 1993 等)で*l-が*ŋ-と完全に合流して ŋ-で実現する他は、通方音的に l-で実現する⁴⁵。また、泥母の箇所で先に述べた n-と l-との混淆現象は、比較的新しい時代に生じた現象であり、來母に*l-を再建する事を妨げるものではない。

表 2 4. 粵語・桂南平話各地点の來母の実現形

	螺	旅	來	梨	蠟	亂	肋	冷
中古音	果合一 平戈來	遇合三 上語來	蟹開一 平哈來	止開三 平脂來	咸開一 入盍來	山合一 去換來	曾開一 入德來	梗開二 上梗來
東莞 ⁴⁶	ŋø2	ŋui4	ŋui2	ŋei2	ŋaʔ8	ŋøn5	ŋək8	ŋeŋ4
広州	lɔ2	ləy4	lɔi2	lei2	lap82	lyn6	lək8	lan4

8. 2. 日母

日母は接近音 j-や半母音-i-で実現すると報告される方言が少なくないが、その一方で ŋ-、ŋi-の形も多くの方音で報告される。Williams (1856: xvi) の introduction でも、日母字「熱」「二」「耳」が鼻音(ng と表記)を声母にとる事があると述べている。賓陽方言で日母が s 若しくは ʃ で実現する現象が見られるが(覃远雄 2006)、これが賓陽方言特有の音変化の所産なのか、それとも西南官話からの借用に由来するものなのかについては、稿を改めて今後解明したい。日母には鼻音である*ŋ-が祖形として再建出来る(但し、*ŋ-が[j-]に近い音でも調音された可能性を否定しない)。

表 2 5. 粵語・桂南平話各地点の日母の実現形

	如	兒	擾	染	然	人	讓	肉
中古音	遇合三 平魚日	止開三 平支日	效開三 上小日	咸開三 上琰日	山開三 平仙日	臻開三 平眞日	宕開三 去漾日	通合三 入屋日
玉林	ɛy2	ŋi2	ŋju4	ŋjm4	ɛin2	ŋan2	ŋa6	ŋok8
賓陽復興	ʃui2	ŋi2	ŋju4	ŋjm4	ʃin2	ŋən2	ŋeŋ6	ŋok8
台山	ʔgui2	ʔgi2	ʔgiu4	ʔgiam4	ʔgen2	ʔgin2	ʔgian6	ʔgok8

⁴⁵ 但し、詹伯慧(1987)や陈晓锦(1993)と同様に莞城区の方音に基づくとされる、李吉劭(2013)の示す東莞方言の音韻体系に於いては、來母は安定して l-で実現している。

⁴⁶ 以下、表に於いて「東莞」は詹伯慧(1987)に報告される東莞市莞城区方言を指す。

広州	ju2	ji2	jiu4	jim4	jin2	jen2	joen6	jok8
----	-----	-----	------	------	------	------	-------	------

9. 結論

本稿に於ける声母の再建は以下のように纏められる：

表 2.6. 粵祖語声母と中古音との対応関係

唇音 (重唇音)	幫母	*p-
	滂母	*p ^h -
	並母	*b-
	明母	*m-
唇音 (軽唇音)	非母・敷母	*f-
	奉母	*v-
	微母	*m̥- (遇・止・臻攝) *m- (山・宕攝)
舌頭音	端母	*t-
	透母	*t ^h -
	定母	*d-
	泥母	*n-
舌上音	知母	*tʃ-
	徹母	*tʃ ^h -
	澄母	*dʒ-
	娘母	*n-
齒頭音	精母	*tʂ-
	清母	*tʂ ^h -
	從母	*dʒ-
	心母	*s-
	邪母	*z-・*dʒ-
正齒音 (二等)	莊母	*tʃ-
	初母	*tʃ ^h -
	崇母	*dʒ-・*z-
	生母	*ʃ-
正齒音 (三等)	章母	*tʃ-
	昌母	*tʃ ^h -
	船母	*ʒ-
	書母	*ʃ-
	禪母	*z-・*dʒ-

牙音	見母	*k-
	溪母	*h-・*k ^h -
	群母	*g-
	疑母	*ŋ ₁ - (遇・止・咸・山・通各攝三四等) *ŋ ₂ - (その他)
喉音	影母	*ʔ-
	曉母	*h-
	匣母	*ɦ-
	以母・雲母	*j- (合口遇・山・通攝、開口) *w- (その他)
半舌音	來母	*l-
半齒音	日母	*ŋ ₁ -

粵祖語の声母一覧：

*p	*p ^h	*b	*m	*w		
*f		*v	*ŋ			
*t	*t ^h	*d	*n	*l		
*ts	*ts ^h	*dz			*s	*z
			*ŋ ₁	*j		
*tʃ	*tʃ ^h	*dʒ			*ʃ	*ʒ
*k	*k ^h	*g	*ŋ			
*ʔ					*h	*ɦ

粵祖語の声母は、破擦音・摩擦音を二系列持ち、唇歯音*f-, *v-, *ŋ-を有しており、また、止攝開口三等に*iの他、*j及び*üが再建される。これを踏まえるに、概して粵祖語は唐代後期以降の漢語音の特徴を有しているといえる。

参考文献

英文

Ball, J. Dyer (1888) *Cantonese Made Easy* (2nd edition). Hong Kong: 'China Mail' Office.

Ball, J. Dyer (1900-1901) The Shun Tak Dialect. *The China Review*. 25: 57-69; 121-140.

Bridgman, Elijah Coleman (1841) *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*. Macao: S. W. Williams.

Bridgman, J. G. (1847) *The Notitia Linguae Sinicae of Prémare*. Canton: the Office of the Chinese Repository.

Chao, Yuen Ren (1947) *Cantonese Primer*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

- Coblin, W. South (1997) Notes on the Sound System of Late Ming *Guanhua*. *Monumenta Serica*. 45: 261-307.
- Coblin, W. South (1999) Thoughts on the identity of the Chinese 'Phags-pa dialects. Simmons, Richard VanNess, ed. *Issues in Chinese Dialect Description and Classification*, 84-144. Berkeley: Project on Linguistic Analysis, University of California.
- Coblin, W. South (2006) *Francisco Varo's Glossary of the Mandarin Language*. Sankt Augustin: Institut Monumenta Serica.; Nettetal: Steyler Verlag.
- Coblin, W. South; Levi, Joseph A. (2000) *Francisco Varo's grammar of the Mandarin language (1703) : an English translation of "Arte de la lengua Mandarin"*. Amsterdam: J. Benjamins.
- Eitel, Ernest John (1877) *A Chinese Dictionary in the Cantonese Dialect*. Hong Kong: Lane & Crawford.
- Hashimoto, Mantaro J. (1978) *Phonology of Ancient Chinese*. Tokyo: Institute for the Study of Languages & Cultures of Asia & Africa.
- Li, Fang-kuei (1977) *Handbook of Comparative Tai*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- McCoy, John (1966) *Szeyap Data for a First Approximation of Proto-Cantonese*. Cornell University dissertation, Ithaca.
- McCoy, John (1986) Modern Suprasegmental Evidence for Consonant Clusters in Proto-Yue. McCoy, John and Light, Timothy ed. *Contributions to Sino-Tibetan Studies*, 367-374. Leiden: E. J. Brill.
- Morrison, Robert (1828) *Vocabulary of the Canton Dialect*. Macao: East India Company's Press.
- Morrison, Robert (1865) *A Dictionary of the Chinese Language* (reprinted) (『五車韻府』). Shanghai: London Mission Press.; London: Trübner & Co.
- Nakano, Miyoko (1971) *A Phonological Study in the 'Phags-pa Script and the Meng-ku Tzu-yün*. Canberra: Faculty of Asian Studies in association with Australian National University Press.
- Pittayaporn, Pittayawat (2009) *The Phonology of Proto-Tai*. Ph.D. dissertation. Department of Linguistics, Cornell University.
- Pulleyblank, E. G. (1986) Dentilabialization in Middle Chinese. McCoy, John and Light, Timothy ed. *Contributions to Sino-Tibetan Studies*, 345-364. Leiden: E. J. Brill.
- Shen, Zhongwei (2005) On the Zero Initials of the *Menggu Ziyun* 蒙古字韻. Ho, Dah-an and Tzeng, Ovid J.L. ed. *POLA forever : festschrift in honor of Professor William S-Y. Wang on his 70th birthday*, 293-319. Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica.
- Shen, Zhongwei (2008) *Studies on the Menggu Ziyun*. Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica.
- Tumurtoogoo, D.; Cecegdari, G. ed. (2010) *Mongolian Monuments in 'Phags-pa Script: introduction, transliteration, transcription and bibliography*. Taipei: Institute of Linguistics, Academia Sinica.
- Tsujii, Nobuhisa (1980) *Comparative Phonology of Guangxi Yue Dialects*. Tokyo: Kazama Shobo.
- Williams, Samuel Wells (1856) *A Tonic Dictionary of the Chinese Language in the Canton Dialect*. Canton: the Office of the Chinese Repository.
- Yue-Hashimoto, Anne Oi-kan (余藹芹) (1972) Two Features of Proto-Yue Initials. *Unicorn*, 9: 20-40.

中文

- 陈海伦、林亦(2009)《粤语平话土话方音字汇 第一编 广西粤语、桂南平话部分》上海:上海教育出版社.
- 陈晓锦(1993)《东莞方言说略》广州:广东人民出版社.
- 陈晓锦、翁泽文(2010)《粤语西翼考察——广西贵港粤语之个案研究》广州:暨南大学出版社.
- 陈小燕(2009) 广西贺州八步(桂岭)本地话音系.《方言》1: 53-71.
- 高本漢、趙元任、羅常培、李方桂合譯(1940)《中國音韻學》長沙:商務印書館.(Karl-gren, Bernhard (1915-1926) *Études sur la Phonologie chinoise*. Leyde; Stockholm; Gotembourg.)
- 广西壮族自治区地方志编纂委员会(编)(1998)《广西通志·汉语方言志》南宁:广西人民出版社.
- 郭书林(2006).《西儒耳目资》异读研究.北京语言大学硕士论文.
- 黄海瑶(2008) 广西横县百合平话音系.《桂林师范高等专科学校学报》22(2): 15-24.
- 黄昭艳(2006) 灵山横州话同音字汇.《桂林师范高等专科学校学报》20(3): 14-20.
- 金尼閣(1957)《西儒耳目資》北京:文字改革出版社.
- 李吉劭(2013)《东莞方言分类词典》广州:广东人民出版社.
- 李连进(2000)《平话音韵研究》南宁:广西人民出版社.
- 李连进、朱艳娥(2009)《广西崇左江州蔗园话比较研究》桂林:广西师范大学出版社.
- 李荣(主編)(1997)《南寧平話詞典》南京:江苏教育出版社.
- 利瑪竇(1957)《明末羅馬字注音文章》北京:文字改革出版社.
- 梁伟华(2007) 崇左新和蔗园话音系特点.《南宁师范高等专科学校学报》24(1): 101-104.
- 梁伟华、林亦(2009)《广西崇左新和蔗园话研究》桂林:广西师范大学出版社.
- 梁福根(2005)《桂北平话与推广普通话研究——阳朔葡萄平声话研究》南宁:广西民族出版社.
- 林亦(2009) 南宁石埠话语音研究.郑作广(编)《广西汉语珍稀方言语音研究》174-217. 南宁:广西民族出版社.
- 龍異騰(1998) 從唐代史書注解反切看輕重唇音的分化.《漢語史研究集刊(第一輯)》368-383. 成都:四川大學出版社.
- 羅常培(1930) 耶穌會士在音韻學上的貢獻.《國立中央研究院歷史語言研究所集刊》1(3): 267-338.
- 羅常培(1933) 釋內外轉.《國立中央研究院歷史語言研究所集刊》4(2): 209-226.
- 平田昌司(1983-1984) 吳語幫端母古讀考.《均社論叢》14: 18-30; 15: 22-26.
- 钱曾怡(2010)《汉语官话方言研究》济南:齐鲁书社.
- 覃世贞(2007) 田东蔗园话语音系统.《桂林师范高等专科学校学报》21(1): 1-7.
- 覃远雄(2005) 桂南平话古晓、匣、云、以母字的读音.《方言》3: 209-218.
- 覃远雄(2006) 桂南平话古见组声母和日母的今读.《方言》3: 228-238.
- 覃远雄(2008) 平话和粤语古庄母的特殊读音.《方言》4: 340-349.
- 唐昌曼(2005)《桂北平话与推广普通话研究——全州文桥土话研究》南宁:广西民族出版社.

- 王力(1957-1958)《漢語史稿》北京: 科學出版社.
- 謝建猷(2007)《广西汉语方言研究》桂林: 广西人民出版社.
- 余藹芹(2006) 粵語構擬之二: 聲母. 何大安、張洪年、潘悟雲、吳福祥(編)《山高水長: 丁邦新先生七秩壽慶論文集》75-170. 台北: 中央研究院語言學研究所.
- 袁家驊(1960)《汉语方言概要》北京: 文字改革出版社.
- 詹伯慧; 張日昇主編(1987)《珠江三角洲方言字音對照》香港: 新世紀出版社.
- 詹伯慧; 張日昇主編(1994)《粵北十縣市粵方言調查報告》廣州: 暨南大學出版社.
- 詹伯慧; 張日昇主編(1998)《粵西十縣市粵方言調查報告》廣州: 暨南大學出版社.
- 張洪年(2002) 21 世紀的香港粵語: 一個新語音系統的形成. 《暨南學報》24(2): 25-40.
- 張均如(1982) 广西中南部地區壯語中的老借詞源於漢語古“平話”考. 《語言研究》1: 197-219.
- 張均如(1987) 記南寧心圩平話. 《方言》4: 241-250.
- 張均如、梁敏、歐陽覺亞、鄭貽青、李旭練、謝建猷(1999)《壯語方言研究》成都: 四川民族出版社.
- 趙彤(2007)《分韻撮要》的聲母問題. 《語文研究》1: 57-60.
- 鄭作廣(1994) 百色蔗園話的語音特點. 《右江民族師專學報》7, 1-2: 31-35.
- 中國社會科學院語言研究所等編(2012)《中國語言地圖集(第2版) 漢語方言卷》北京: 商務印書館.

和文

- 何群雄(2002)『初期中國語文法學史研究資料——J.プレマールの『中国語ノート』』東京: 三元社.
- 高田時雄(2000)「近代粵語の母音推移と表記」『東方學報』72: 754-740.
- 藤堂明保(1952)「官話の成立過程から見た西儒耳目資」『東洋學』5: 99-122.
- 濱田武志(2012)『湖南省江華瑶族自治県の梧州話の粵語に於ける系統論的位置付け』修士論文, 東京大学.
- 濱田武志(2013a)「粵語・桂南平話の共通祖語の韻母」『東京大学言語学論集』34: 1-23.
- 濱田武志(2013b) 在粵語、桂南平話方言史中存在的兩種介音. 第十八屆國際粵方言研討會.
- 濱田武志(2013c)「桂南平話の系統的單一性に関する試論」第63回日本中國語学会全國大會.
- 樋口康一(2001)「パスパ文字」河野六郎・千野栄一・西田龍雄(編)『世界文字辞典』727-734. 東京: 三省堂.
- 平山久雄(1967a)「中古漢語の音韻」牛島徳次・香坂順一・藤堂明保(編)『中国文化叢書1 言語』112-166. 東京: 大修館書店.
- 平山久雄(1967b)「唐代音韻史に於ける輕唇音化の問題」『北海道大学文学部紀要』15(2): 242-184.

粤语及桂南平话的共同原始语言的声母

濱田武志

关键词: 粤语 桂南平话 系统发生关系 构拟 声母

要旨

粤语及桂南平话的共同原始语言“粤祖语”拥有以下革新特征：一、具有两套(齿龈音与卷舌音)舌冠(coronal)擦音、塞擦音；二、微母被构拟为已经轻唇音化了的音值* η -；三、止撮开口三等被构拟为* η (精组)、* η (庄组)。而粤祖语还拥有以下保守特征：一、保存全浊声母的浊音成分；二、匣母(除外云母)开口、合口都保存* f -。

Rhyme in the Proto-language of Yue and Guinan Pinghua Dialects

HAMADA Takeshi

Keywords: Yue dialects, Guinan Pinghua (Pinghua dialects in southern Guangxi), genetic relationship, reconstruction, onset

Abstract

Proto-Yue, the proto-language of the Yue and Guinan Pinghua dialects, has the following innovative features: 1) it has two sets (dental and retroflex) of coronal affricate and fricative, 2) the descendant of the ancient initial Wei (微) is reconstructed as labiodentalized * η -, and 3) ancient rhymes belonging to the Zhi (止) rhyme group, open-mouth (开口), and Division III are reconstructed as * η with the Jing initial group (精组), and as * η with the Zhuang initial group (庄组). Additionally, Proto-Yue also has some conservative features: 1) it preserves the ancient Quan-zhuo (全浊) initials as voiced, and 2) ancient initial Xia (匣) (except Yun (云)) with open-mouth or closed-mouth (合口) remains fricative * f -.

(はまだ・たけし 東京大学大学院博士課程)